
K - O N ! ~ふわふわ日和~

紅茶花伝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

K・ON～ふわふわ日和～

【Zコード】

Z69580

【作者名】

紅茶花伝

【あらすじ】

路上ライブで出会った二人。そんな一人が繰り広げる純粋な物語。

書く小説です！！純愛系を目指して書いて行こうと思います。
なかなか使いなれずにおかしな改行や表現。誤字脱字があるでしょうが暖かく見守って上げて下さいませ（笑）

第一話 出会い（前書き）

初めて書いた話ですね（笑）楽しんで頂けると幸いです。

第一話 出会い！

春休みの晴れた日曜日、僕は愛用しているアコーディックギターを持つていつもの場所に出掛けた。

僕がいつも一人で路上ライブをしている場所はとある商店街。水曜日と日曜日の週に一回、ここで自分が作ったオリジナル曲などを演奏している。たまに見ててくれる人が一人や二人いるくらいだったけど今日は少し特別だった。

いつものように歌っていると少し茶髪のショートヘアの女の子が買い物袋を持ってこちらを見ていた。

見ていたというよりは聞き入っていたと言う方があいかもしない。彼女は目をキラキラさせながら見入っていた。女の子に見られるのは恥ずかしかったけど悪い気はしないので続けていた。

演奏が終わるとその女の子が近づいてきた。

「あ、あのっ！」

「はっ、はい！」

「その子の名前、なんていいうの？」

最初は少し意味がわからなかつた。彼女は何を言つてゐるのだろうか？

「その子って？」

「君が使つてゐるアコーディックギターだよーもしかして名前ないの？」

ギターの名前なんて考えたこともなかった。返答に困つていると彼女はいった。

「じゃあアコーディックギターだからアツコちゃんだねー」つむぎのギ

ー太も可愛いんだあ……」

ギー太とは彼女のギターの名前だろうか?なかなか凄いネーミングセンスの持ち主かもしれない。

「少しギター貸してくれない?」

上田遣いは反則だと思います。

「あ、ああ いいよ。」

「思つたより軽いんだね~。」

そういうと彼女はいきなり僕がさつきまで弾いてた曲を弾き始めた。そのことに僕はかなり驚かされた。なぜならこの曲は僕が今日路上で初めて弾いた曲だったからだ。

「相対音感!？」

「相対音感? なにそれ?」

「いや……何でもないよ……。」

「?」

彼女は自分の才能に気が付いていないのだろうか?

「そういえば君はなんて名前? 私は平沢唯って言つただよー。」

「平沢さんね。僕は綱谷直哉つて言つただよひへくね。」

「綱谷くんだけねーようじへー。」

それから三十分ほど僕らは音楽について話していたら平沢さんの携帯が鳴った

「あ、憂?、ゴメーンーお使い忘れてたー。」

平沢さんはそういうと

「お使いだから帰らなきや。綱谷くんまた路上ライブ聞かせてね。
バイバイ。」

と言つと走つて帰つてしまつた。

よく考えるとこんなふうに女の子と話したのは初めてだなと思つたりなかなか可愛い子だったなと少し嬉しくなつた。

僕もギターをケースにしまいその場を後にした。

第一話 出会いー（後書き）

誤字脱字の「」指摘、「」意見、「」感想お待ちしております。

第一話 それぞれの第一印象（前書き）

早くも第一話を投入。

空いてる時間に書いていきます。

第一話 それぞれの第一印象

「綱谷宅にて」

「ただいま。」

「お帰りなさい。」

いつも道理の母と子の挨拶だ。ちなみにうちは父と母と僕の三人家族だ。

「飯出来るわよ。」

そう言われて僕はいつも机の上に席について飯を食べる。
風呂に入り終わり寝るときに今日初めて会った平沢さんのことを思い出していた。

変わった女の子だったけど可愛かったな…。また会えたらいいな…。

そんなことを考えてるうちにいつのまにか眠ってしまった。

「平沢宅にて」

「憂~、ただいま。」

「お姉ちゃん遅いよ~。」

綱谷くんと話しているうちに結構時間が経ってしまい私は憂に怒られてしまった。

「お姉ちゃん、今日はカレーだよー。」

「やつた～！。マジコロロ入れた？」

「お姉ちゃん…。いれるわけないよ。」

「え～。」

そんな他愛もない会話が続く。

「今日はね、絹谷くんつて人とお友達になつたんだよー。絹谷くんのギターのアツ「ちやん可愛かつた～。」

「絹谷くんつて男の人？」

「うん。ギターが上手でとつてもかつこいいんだ～。」

「私も会つてみたいな～。」

「今度は憂も一緒に絹谷くんの路上ライブ見に行ひよー。」

「でも絹谷さんていつ路上ライブやつてるの～。」

「あ…。」

すっかり聞き忘れていた。仕方ないので来週の同じ時間にまたあの場所へ行つてみよう。そしたらまた会えるかも。

憂と話したりお風呂に入つていううちに寝る時間になつてしまつた。寝る前にギー太を少し弾く。

「ギー太、今日はね、絹谷くんつていう人とお友達になつたんだよ。アツコちゃんつていう絹谷くんのギターとっても可愛かつたなあ～。あ、でもギー太も可愛いいよ！」

そんなことをギー太に話しているうちこ夜は過ぎていった。.

第一話 それぞれの第一印象（後書き）

誤字脱字の指摘、「意見」感想お待ちしております。

第三話 それぞれの学校生活（前書き）

第三話です。

第三話 それぞれの学校生活

「松山高校」

僕の通う松山高校は男子校なので異性に食えていいやつらはとても多い。

故に近くにある桜ヶ丘女子高校の名前が話題にでることも少なくない。

「おー、直哉！」

今僕の名前を読んだのは松江彰まつえあきら。小学校の頃から一緒に親友であり悪友でもある幼なじみで、サッカー部に所属しているイケメンだ。しかしかなりの変態であるため今まで女子にモテた試しはない。

「何だ、彰？」

「昨日路上ライブをしているお前を見かけたんだが一緒に話していた桜ヶ丘の子は誰だ？」

見られてしまっていたのは予想外だったが別にやましことはしないので正直に答える。

「ああ、平沢さん？ 別にギターやつてる感じからまたまた話が弾んだだけだよ。」

「ほう…。で何年生なんだ？」

「聞いてねえよ。」

「んじゃあケー・バンは聞いたのか？」

「初めて会った女の子に聞けるわけないだろーでもまた路上ライブ
聞きてきてくれるじゃこよ。」

「そんな曖昧なこと言じりれないだろ。」

確かにそうだ。自分でも惜しいことをしたと思えてきた。

「いこか、次に会ったら必ず学年とケーバンを聞くんだ。そして俺
に紹介してくれー！」

「結局それかよー。」

とつあえず影を一発殴ったあと僕は別れを告げて家に帰った。

（桜ヶ丘高校）

いつも道理の放課後、そこにはお茶会をする放課後ティー・タイムの
姿があった。

「この前一日忘れしちゃったんだー。」

「えー…」「」

「おー、澪。ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、
れだとー?」

「と、とりあえず落着けー! もしかして勘違いかも知れないだろー!」

「そ、そりですよー! それに唯先輩は天然ですよー!」

「可愛いんだあー。アツコひやんつてこいつギターなんだよ。」

「「はーーー?」

「唯が一田惚れしたの? ギターだったのかよー。」

「やうだよりひちやん?」

「と、とりあえず桜ヶ丘軽音部は志穂禁止だからなー。」

「お~さあがいひちやんー。」

「ちのちの練習始めないか?」

「やうですよー。燐先輩の通りですー。」

「よーじじゅ練習するかー。」

「「ねーーー。」」

ソーハーで本日のお茶会を開きになつた。

第四話 オズビヒケーキと勘違ご（前編）（前書き）

IJWモリ更新します。

第四話 お詫びとケーキと勘違い（前編）

（桜ヶ丘軽音部）

「ふう。」のくらじにしておくか。」

「そうですね、濛先輩。」

「おわつたあ～。」

「お疲れ様～。」

「よしみんな！帰りにケーキ食べに行こつぜー。」

「贊成！」

そういうとみんなは片付け始めた私もギー太を自分のケースにします。

帰り道は夕焼けが綺麗だった。

「そういういえば唯先輩が話してた絹谷さんってどんな人なんですかね？」

「べつに、ギターに惚れただけだから特に大丈夫でしょ？」

「まあ唯は天然だしな…。」

「あずにや～ん。何話してるの～？」

「唯先輩には関係ないです！それに抱きつかないでください。」

「えへ。あすにやんのけちへ。」

「ほりほり、もつすべ着くわ。」

軽音部の5人が喫茶店に入る。

「わーい！ケーキ、ケーキ！」

「はしゃぎ過ぎですよ唯先輩。」

「はあーい。」

「みんな何にする？」

「チーズケーキで！」

「私はショートケーキかしら？」

「んじゅあ私はショコラド。」

「私はモンブランがいいです。」

「じゃあショートとチーズとモンブランが一つとショコラが二つだ
な。飲み物は紅茶でいいな。」

しばらくするとケーキが運ばれてくる。

「ねえ？あれ憂ちゃんじゅないかしら？」

「あ、本当だ…。」

「ちょっと待て。一瞬にいるの男じゃないか…?」

「「えー…?」」

「本当ですね…。」

「まさか彼氏…?」

「お、落ち着け!」

「綱谷君だ…。」

「知ってるのか?唯?」

「うん…。路上ライブやつてた人だよ…。」

「まさか平沢姉妹を付け狙うストーカーじゃ…?」

「まだそいつと決まったわけじゃ…。それに憂と親しそうですし。」

「ヤバい、」「ちみた!」
「バツとみんなはメニューを見始める。

「とりあえずどうする?」

「もしかして彼氏かもしれない。」

「そんなあ〜。」

「あ、憂うちゃん来たぞ。」

続く

第五話 ねづびとケーキと勘違ご（後編）（前書き）

夜にじつそり更新します。

第五話 お詫びとケーキと勘違い（後編）

「帰り道」

「6時か…。」

僕はそう感覚帰り道を早歩きで歩いていたときだつた。いきなり誰かが胸元にあたつた。

「…」

「す、すこません…って、平沢さん？」

髪型が前会つた時と違いポニーテールだがこの顔は間違いない。

「あ、」めん。「

そつ言つて僕が手を差し伸べると平沢さんは手を掴んで立ち上がつた。

「すこません…。」

「いや…もう少し急いでたから。」

「あの…。失礼ですがどちら様ですか？」

そつ言わると少し傷付く。

「覚えてないかも知れないので路上ライブやつてた綿谷だよ…。」

「路上ライブ…？」

そう言つて彼女は少し考へると急に閃いた（？）顔になつた。

「もしかして、その入ショートボブで前髪をピンで留めてませんで
したか？」

「うん。ギー太がどひのひのひでたけど…。あれ？ 平沢唯さん
じゃない君はの？」

「その人間違いなくお姉ちゃんです。私は平沢唯の妹の平沢憂と言
います。」

そういえば電話で憂が呼んでるつて言つて帰つていったな…。この
子か…。

「あ、卵が…。」

「「」、「めんー弁償するからー。」

「いえ、大丈夫ですよ。2~3個割れただけみたいですから…。」

「でも、悪いし…」

僕がそう言つたら平沢憂さんは少し考へて言つた。

「じゃあこの近くに美味しいケーキが有るんです。ご一緒しません
か？」

バイト代が入った直後なのでケーキ位の出費は全然痛くない。

「あ、じゃあ…。」

「ひつて平沢さんの妹の平沢憂と知り合つた。

「喫茶店へ

「JUJUのケーキ美味しいんですよー。」

平沢憂さんは少しはしゃいでいる。姉に比べかなりしつかりしているように感じるがケーキではしゃぐのはやつぱり女の子と並ぶことなのだろう。

「あ、じゃあチーズケーキとコーヒーを…。」

「私はストレートティーとショットで。」

そういうえばまだ名乗つてなかつたな、と思つていると

「たしか綿谷さんですよね…？」

「えっと…、平沢さんは。」

「憂でいいですよ。平沢じゃお姉ちゃんと区別してほしいですから。」

「じゃあ憂さんは？」

「別にそんな悪まじなくとも。」

「じゃあ、憂ちゃんはぜひで僕のJUJUを?」

「お姉ちゃんから少し聞きました。」

そう言って憂ちゃんは少し笑った。

「路上ライブをしてるとしても上手な人が居てとっても可愛いギター持つてたって言つてました。」

「へえ。」

女の子に褒められてるのは悪い気はしない。ギターって言うのが少し気になるけど……。

「お姉さんもギターやってるの?」

「はい。桜ヶ丘の軽音部ですよ。」

「道理でつまいまずだよ。」

それから少し話をしているとヒンヒン話している五人組が目に入った。

「あ、あれ平沢さんじゃない?」

五人と目が合いつと一斉にメニコーを見始めた。怪しそうだ。

「あ、本当ですね。向こうに移動しましょう。」

「あ、ちよっとー。」

そう言う頃には憂ちやんは向こうに立ってしまっていた。仕方ないので移動する。

「や、やあ、憂奇遇だね！」

カチューシャで前髪を止めた子が言った。

「デ、デートか？」

とロングで姫カットの子がいう。

平沢さんは

「憂～。私じゃ満足出来ないの～？」

と涙目。。

眉毛が太い子は落ち着いていたがツインテールのちびっこをつきから睨まれている。

「大丈夫だよ。私はお姉ちゃん一筋だからね。」

と憂ちやんは平沢さんを慰めている。少し心が痛いのは何でだろう？

「えっと…。僕は絹谷直哉って言います。憂ちやんとはさつきいろいろあって…。」

とりあえず事情を説明したらみんな分かつてくれた。ツインのちびっこ以外は。

「なんだ！ そういうことか！ 私は田井中律！」

とカチューシャの子から自己紹介が始まった。

「私は秋本澪。 よろしく。」

とロングの姫カットの子。

「琴吹紬です。 よろしくお願ひします。」

と眉毛の太い子がいう。 礼儀正しい…。

「平沢唯だよ！ 久しぶりだね！」

平沢さんが言った。

「中野梓…。」

生意気なちびっこが言つ。

「よろしくね。 みんなはクラスメイトかなんか？」

「楽器持つてんの見て分からんですか？」

本当に生意氣だな…。

「梓！ ごめんね。 私たちは桜ヶ丘の軽音部なんだ。」

秋本さんはしつかりしている。 まとめ役なのだろう。

「君たちが桜ヶ丘の軽音部なんだ。」

「そついえば絹谷もギターやってるらしいじゃん！」

「まだ下手だけどね。」

こんな話をしているとすでに7時前になっていた。

「ヤバつーみんなそろそろ帰るぞー！」

田井中さんがやつぱりこれで解散と言つことになった。

帰つ道はたまたま平沢姉妹と一緒にだつた。

「綱谷君は最近路上ライブしないね…。」

「じめん。少し書いて。またすぐこ始めるよ。」

「楽しみにしてるよー！あ、私たちここ右なんだー！綱谷君はどこへ…。

「僕は左だよ。じゃあね。」

「バイバイ！」

「あひづなー。ケーキあつがとうございましたー。」

そつぱつて平沢姉妹と別れて少ししたら慶ちゃんが追いかけってきた。

「直哉さんに連絡先聞こいつと思つてたら忘れていました。」

と息切れをお越しながら慶ちゃんは言つた。

「あ、分かった。」

僕は戸惑いながらも携帯のアドレスを憂ちゃんと交換した。

「おつがじいじもつたー。わよつたひー。」

「じゃあね。」

女の子にアドレスを聞かれたのは久しぶりだな…。今日はいい日だ…。そう考えるついに僕は家に帰りついた。

第六話 会議！（前書き）

早めに更新。 短めです。

第六話 会議！

（桜ヶ丘軽音部部室）

「よし、みんな揃つたなー。ムギ、唯は本当に遅れるんだな？」

「ええ。唯ちゃんは今田掃除当番だから間違いないわ。」

「よし、今日諸君に集まつて貰つたのは他でもないー。昨日の怪しい男。編谷直哉についてだ。諸君の意見を聞きたい。」

「私は別に構わないと思つが…。」

「私もお友達でしたら構わないと。」

ムギが友達を強調して言つた。

「私は反対ですー！松山高校の男は女の子にだらしがなくてしつこいから気を付けろって中学生のじゅうから言われてましたからー。」

「でもそんなに悪いやつには見えなかつたぞ。」

「澪先輩は少し甘過ぎますー！唯先輩のためでもあるんですよー。」

「梓、とつあえず落ち着け。」

「律先輩までー！」

「まあとつあえず梓ちゃんの言つ通り用心だけはして起きましょー

？」

「アリだな。もつもの」とあるかもしれないしな…。」

「えじや、みんな綿谷が戻をすむアリーナ議終」。」

「アリね。みんなアリが戻をすむ頃だし…。」

「みんなお待たせー。」

「お、唯来たかーんじや練習始めるアー。」

「えー。先にケーキ…。」

「えじや わいじしてからか…。」

「わーーー。」

「アリだ、唯。綿谷の」となんだか…。」

「綿谷君がアリしたの?」
「一応気を付けるよ、男は狼だから。」

「アリ、そうだねー。」

「えじやアリの練習始めのアー。」

「アリー。」

第七話 ヌキツナヘ・シテハヘー? (前編)

繋がりなので短めです。

第七話 ドキドキ！？合コンバー？

（松山高校）

「合コン？」

「そうだ、結構可愛い子が来るー！」

「だるい。」

「頼む。後一人必要なんだ。」

「他当たれ。」

「誰もいないんだよ。」

「仕方ないな…。んで何人くるの？」

「3対3の6人。しかも3人とも桜ヶ丘だぞーそして場所はかの有名なマジカルランドだ。」

「うわ、入場料どうすんだよー！？」

「安心しろ。準備してある。」

「ああ、ならいいや。」

彰はなんか金持ちだから気にしないでおいっ。

「んで、いつだ？」

「ああ、明日の10時に駅に集合だ！」

「はやつー。」

「でもどうせ暇だろ。」

「まあ暇だが…。」

全く面倒なことを引き受けてしまった。相手は桜ヶ丘か…。一体誰が来るんだろうな…。まさか軽音部か？

「で、後一人男は誰だ？」

「ああ、あと一人は祐希だ。」

定基祐希隣のクラスのイケメンで、いつも同じサッカー部。たしか去年のクラスが一緒だったな。

「あ、あいつか。」

「もう言つことだ。んじゃまた明日な。」

本当に面倒なことを引き受けてしまった…。

（続く）

第八話 遊園地！（直哉編）（前書き）

お気に入りが10人を突破し感想をすでに2名の方が書いて下さいました。嬉しい限りです。本当にありがとうございます！！

第八話 遊園地！（直哉編）

（～駅前）

「ヤバい！遅れる！」

ついに田曜日が来てしまった。とりあえず駅に行くために走っている。なぜかつて？寝坊したんだよ！

「はあはあ…。間に合つたか…？」

「おい！遅いぞ！」

声がするほうを見ると彰と祐希、他に三人女の子が来てた。視線が痛い。

「すいません！遅れました！」

「ほら、さっさと行くぞ。」

電車の中は意外と混んでおり女の子3人を座らせて男3人が前に立つ形になつた。

「んでさー。」

「本当に？」

みんな話しをしているが輪に入りづらい…。

「ねえねえ。綿谷君。」

「ん？」

いきなり話しかけられて少し驚いたが普通に返す。えーとたしかこの人は草薙楓さんだつけ？少しギャルっぽい気がする。

「綱谷は何か特技とかないの？」

「特技ねえ……。」

「こいつギターめっちゃ上手いよな。」

「おい！彰！」

「照れんなって！」

「へえ、凄いじゃん！」

なんか誉められたらしい。

「お、あれじやね？」

窓の外になかなか大きな遊園地が見える。あれがマジカルランドか……。
駅に着くとすぐに園内への入り口が見えてくる。

「あー。意外とでかいな。」

「なんだ直哉。初めてか？」

「ああ、初めてだ。」

入場券を係員に渡し園内に入場する。入場したうすぐにネズミ的なマスコットキャラがくる。

「あ、マッキー来たよー。写真撮らない?」

草薙さんの提案でみんなキャラクターと写真を撮つてこる。しかしみんなよくはしゃげるもんだと感心する。

「次あれ乗ろ! ザー!」

彰がいつ。こいつはすっかり前橋さん(合コンメンバーの一人)と出来ていた。後の二人は祐希狙いか。人気のジェットコースターに乗つたりしてこらしつつ彰がどこからかクジを取り出した。いつ用意したんだ…。

「今から男女で一人行動にしようぜ!」

「ああ。」

クジで祐希が中田さん(合コンメンバーの一人)。彰が前橋さん、僕が草薙さんになった。明らかにイカサマだろ? 草薙さんは凄い不満そうである。

「んじゃ 3時に集合な!」

祐希がそういうと各自バラバラに散つていった。

「とりあえずなんか食いませんか?」

時間ももう一時を過ぎていたしね。腹も減つたしね。

「あや」にスタンダードあるよー。」

「じゃ行きますか。」

スタンダードで僕はホットドッグを草薙さんはアイスを買っていた。しかし物価が高い。何が夢の国だ。」

「ほら縄谷君。あーん。」

「そういうて口に入れる直前で自分で食べるんじゃないんですか？」

「あ? バレた?」

「やつぱつ…。」

「騙されるかと思ったのに…。」

「はは。おわか。で、このあとどうします?」

「少し疲れたしこちやつていたいかな?」

「わかりました。」

「うは言つたものの一人きりだと話す話題がない。

「そういえば草薙さん祐希のやつ狙つてしませんでしたか?」

「あ、分かった?」

「やつぱつ。」

「やうこえば縄谷はなんで」の合言葉来たの?あんまりガッつてないし。」

「数合わせですよ。」

「大変だね~。」

話が終わってしまった…。なんかこんな状況はとても苦手だ…。

「トイレって来ます。」

「縄谷、ちょっとドリカシーないよ。」

そう言つて草薙さんに手でシッシッとされた。まあ僕自身この状況から逃げたかつただけだが。

携帯で時計を見るともうすぐ3時を示すとしていた。

(少し急ぐか…。)

そう思いながらトイレから出たあの生意気なツインテールのちびっこに出会った…。

一瞬の刹那、このちびっこツインテールが放った言葉は僕にとって衝撃的なものだった。

（続く）

第八話 遊園地！（直哉編）（後書き）

まだまだ遊園地編は続く予定です。

第九話 GO!GO!遊園地！（前書き）

また繋ぎなので短いです。

第九話 GO-GO-遊園地ー

「桜ヶ丘軽音部」

「マジカルラング？」

「ええ。お父さんの会社がキャンペーン始めたの。その中の景品でマジカルラングの招待券があつたんだけど、お願いして少し余分に取つて貰つたの。」

「ほお、ムギ。褒めて使わす。」

「ふふふ。褒められひやつた。」

「律、偉そうだぞ。」

「まあまあ澪りやん。」

「でね、6枚あるから私とじつちやんと澪りやんと梓ちやんで5枚あるナビあと一人誰を呼ぶ?」

「優ちゃんはどうだ?去年の大晦日にお世話をなったから。」

「私も優ちゃんがいいと想うね。」

「じゃあ誰りやんが優ちゃんに来てくれる?」

「あの~。ムギ先輩。こいつ行くんですか?」

「それがね、このチケット今週の日曜日にしか使えないの…。」

「ああ大丈夫じゃね？用事ある人～？」

シーン…。

「ほり、誰もいないし。」

「じゃあ今週の日曜日みんな空けといてね。」

「分かった。」

「楽しみだなー！」

「だね、澪ちゃん！」

（平沢家）

「憂～。『飯なに～？』

「今日はカレーだよー！」

「わーい！カレー、カレー！」

「今準備するね。」

「やついえば今週の日曜日にムギちゃんが軽音部のみんなと一緒にマジカルランドに行くことになったんだけど憂も行こうよー。」

「え？行きたいけど入場券とかは…？」

「六枚無料で手に入つたらしいよ。軽音部は5人だから残り一枚は
憂の分だつてみんなが言つてたよ。」

「そつなんだ。じゃあ一緒しようかな?明日畠さんにお礼しない
とね!」

「そつだね!」

（続く）

第十話 遊園地一（桜ヶ丘軽音部編）（前書き）

更新します。

第十話 遊園地ー（桜ヶ丘警察署編）

くー駅

「おい。みんな待つた?」

「あ、おはよ。つむりさん、黒川さん。」

「ねまといいわ。」

「今日も唯、遅刻しないんだな。」

「うそー。憂が起しつてくれたからねー。」

((出来た妹だ…))

「梓は？」

「あー、梓さんから回し列車に乗るってメールでもつぶしたり来ぬって書いてたよ。
マサトやんねー。」

「マサトは途中から回し列車に乗るってわ。」

「あ、あすにやん來たよー。」

「すこまかんー。遅れました。」

「おはよ。梓さん。」

「ねまといいわ。」

「おせよひ様。」

「あれー? もしかして昨日楽しみで眠れなかつたとか……?」

「ち、違こますー。」

「ほう、凄に荒てようだね。」

「うう。」

「律。梓を弄るのはそれくらいたして行へば。そろそろ列車出のしな。」

「せうだな。んじやレッジバーー。」

「列車の中~

「つつかやん、ムギちゃんそつてビールで乗るんだつけ~。」

「たしか、この駅だつた気が……。」

「あ、あれムギじゃないか?」

「お~い。ムギちゃん。うひうひー。」

「あ、嘘れど。おせよひー! わこわこ。」

「おー。ムギ、おせよひー。」

「私、みんなと遊園地行くのが夢だつたんですね。」

「お、あなたがうへやー。」

「オッシャー！ 楽しむぞー！」

マジカルランド

「ああー。あー、やんー。憂ー！マジッキーダー！マジッキーマウスがーいのー！」

写真 写真！」

「待つて下さい唯先輩！」
「待つてよお姉ちゃん！」

卷之三

「そうですね。」

「オッシャー！ じやまではお化け屋敷行つてみよー。」

「嫌だ！」

「行け、アリババ！」

תְּהִלָּה ...

「お化け屋敷」

うがー（得体の知れない着ぐるみの鳴き声。）

「ルイイイイイイ！」

「お、落ち着け、澪。」

「澪ちゃん、大丈夫よ作り物だから。」

「だつてだつて…。」

「お姉ちゃん、澪さん怖いの苦手なんだね…。」

「うふ、痛い話も苦手なんだよ。」

「い、意外ですね。」

「怖くない怖くない…。」

「そ、そろそろ出口だな。」

「次は何に乗る?」

「次はジユウト「ースターに乗るわぜー。」

「え? 私は絶叫系はちょっと…。」

「ほら、行くぞみんな!」

その後、一回田で澪とムギが、二回田で憂と梓、三回田で律と唯がギブアップした。

「む、さすが三回はきついな唯…。」

「やうだね、つちひちゃん…。」

「大丈夫お姉ちゃん?」

「えへへ、なんとかね。」

「怖くない…怖くない…。」

「大丈夫ですか？ 澄先輩。」

「じゃあもう回いくか！」

「嫌だ！」

「仕方ないな…。じゃあコーヒカツプでいいか？」

「それなら…。」

「コーヒカツプ

「と、止めてくれ！」

「あははは、意外に早く回るんだね！」

「やりすぎですよ、律先輩…。」

「うふふ。楽しいわあ。」

「い、意外にムギさんが強いですね…。」

「も、もうだめ…。」

（～～～～～～～～～～～～）

「いやー。コーヒカツプって意外と回るんだなー。」

「も、もう乗らない…。」

「澪ちゃん、大丈夫？」

「じゃあそろそろ会にいようかー。」

「疲れたしねえ…。」

「あの、トイレに行つて来て良いですか?」

「ああ、じゃあ梓一緒に行こうか。」

「トイレー

「律先輩、先に出でますねー!」

「あいよ。ひょっと髪乱れたから少し直してから行へわ。」

「ふう、急いで戻らないとな…。草薙さん待たせてる…。」

「あ、あなたはー!」

「ん?えつと、たしか…、中野さんだっけ?」

(なんで一人でこんなとこに?まさか平沢姉妹を付け狙うストーカー!
ー!?)

「り、律先輩!早く来て下さいー。」

「ん?どうした、梓?ってお前は綱谷…?まさか…平沢姉妹のスト

「カー！？」

「え？違う？。」

「ちょっと来い！」

「な、なんでだあ？。」

（続く）

第十一話 龜裂（前書き）

やつといふ遊園地編終わりです。疲れました…。

第十一話 龜裂

（遊園地）

皆さん、僕はいまマジカルランドのレストランの角の席で6人の女子に囲まれて尋問を受けています…。

「何でお前は一人でマジカルランドにいるんだ？」

「だから友達と…。」

何でこうなったかと言つととりあえず中野さんに勘違いされて田井中さんに絡まれている間に中野さんが呼んできた琴吹さんと秋本さんとの四人で抑えられて連れてこられた。男とも言えど四人がかりでは勝てるわけもなくこつして尋問を受けている。

「嘘です！だつたら何で一人だつたんですか！」

「確かに怪しいですね…。友達と来たつていつもも証拠無しじゃ無い理があるんじやないでしょうか？」

「しょ、証拠つて…。」

「あの…、皆さん…。さすがに決めつけ過ぎじゃ…。」

憂ちゃんがフォローしてくれるがすぐ元反論される。

「ダメだよ憂ー！ストーカーに甘くしたらー。」

「あ、梓ちゃん…。」

平沢さんはさつきから悲しそうにして少しおどしている。秋本さんは一応連れて来たが本当にストーカーかどうか決めかねているようだ。

「綱谷くんは本当に友達と来たのか?」

「やうだよ…。」

「だけど私達ももしものことを考えたらいいじゃないといけないんだ。」

確かにそれはわかる。平沢さんは美人だしストーカーがいると言われたら大抵の人は信じるだろ? が、それだと今回は僕が困る。

「だから本当にストーカーじゃないんだって…。」

「だつたら証拠を見せて見るよ…。」

「どうしますか律先生? 警察に突きだし…。」

「みんな、もう止めてよ…。」

今まで何も言わなかつた平沢さんが口を開いた。

「唯…。」

「綱谷くんは何も悪くないよ…。」

そう言った平沢さんは……泣いていた。
多分、自分のせいで責められている僕を見て優しい彼女は申し訳ない気持ちになつたのだろう。

「唯……」

「唯ひやん……。」

「お姉ちやん……。」

「唯先輩……。でもやつぱり……。」

「直哉！探したぞ！」

険悪な雰囲気のなか、そこに現れたのは彰だった。

「あ、彰。」

「お前……三時集合つて言つたじやん。かれこれ一時間たつたぞ……。メール入れても返信来ないし……。」

「じめん。そういうえば祐希や草薙さん達は？」

「三時十分ぐらいに俺が前橋と喧嘩してた……。先に女の子全員帰っちゃつた。祐希は外で待つてる。お前どうやら取り入つてるみたいだから先に外で待つとくわ。」

彰はそう言つと外に出てしまつた。しかしあ、なにほともあれこれで僕の無実は証明されたわけだ。

「「」あん…。」

「「」みんなセー…。」

「すまない…。」

「…。すこせんでした…。」

桜ヶ丘軽音部のみんなが口々に僕に謝る。端から見れば悪者は僕だ
みたい。

「縄谷くん…。ごめんね…。本当にごめんね…。私のせいだね…。」

平沢さんに何て声をかけたらいいのかわからない。

「ああ。まあ、誤解が解けてよかつたよ…。あの、やあやろ行くね。
外で彰が待ってるしや…。」

そつこうと僕は逃げるように外に出た。一いつして今週の休日は疲れ
と直接ではないにしろ平沢さんを泣かせてしまった罪悪感が残った。
少し心が痛かった。

～続く～

第十一話 龜裂（後書き）

今回は修羅場を入れてみました。まだ少し甘かったですかね？
感想等お待ちしております。

第十一話 憂みと決意（前書き）

最近暇あがていつも小説書いてる紅茶花伝です。
ついあえず投稿します。

第十一話 憶みと決意

（桜ヶ丘軽音部）

月曜日になつた。私はこいつのように部屋にいた。いつもはみんなで楽しい話をしながらお茶をしているが今日の話は少し重かつた。

「なあ誰。縄谷から憂ちゃんに返信きたか？」

「へへん。まだ来てない。」

「やうか…。」

「悪こじとしかやつたね…。」

「やうね…。」

みんなの空気が重い。それぞれ責任を感じているのだらつ。

「あ、私、今日用事があつたからみんなまた明日ね。バイバイ。」

「おう。また明日。」

「唯先輩、わよつなり。」

「またな。」

「バイバイ、憂ちゃん。」

用事があると言つたのは嘘だ。ただ今は少し気分を落ち着けたかつた。

（帰り道）

私は珍しく一人で歩いていた。こうやって一人で帰るのは久しぶりである。しばらく歩いていると後ろから声がした。

「あら、唯じやない。一人？」

「あ、和ちゃん。」

「どうしたの？今日は元氣ないわね。部活は？」

「えへへ、何でもないよ。今日は早く帰りたかったんだ。」

「唯、ちよつと喫茶店寄つていきましょ。」

「え？ 今日はちよつとお金ない…。」

「私の奢りよ。ほり早く。」

「あ、うん。」

（喫茶店）

私は和ちゃんと連れられていつもの喫茶店に来ていた。ここは憂と絹谷くんが一緒にいた喫茶店もある。

「ほり、唯は何にする？」

「あ、じゃあストレートティー…。」

「わかった。すいません。ストレートティー2つ。」

しばらくするとストレートティーが来た。和ちゃんは少しストレートティーを飲むと口を開いた。

「ねえ唯。今日また会ったの?」

「何でもないよ…。」

「唯は嘘が下手ね。幼稚園からの付き合いなんだから私がわからな
いわけないでしょ。」

和ちゃんはすべてお見通しみたいだった。私は観念して話始めた。
もしかしたら私も話たかったのかもしれない。

「昨日ね、お友達に酷いことじつひつたんだ…。」

それから私は和ちゃんと全部話した。綱谷くんのこと。昨日遊園地
に行つたこと。そしてセレーニで綱谷くんに酷いことをじつひつたこと
…。

「それは、やっぱ軽音部のみんなが悪いわね。」

「うそ…。」

「でも大丈夫よ。決してみんなに悪気があつたわけじゃないから、
きちんと謝つたら彼も必ず許してくれるわ。だから次に会つたら必
ず謝りなさいね。」

「うそ、やうだよね。ありがとつ和ちゃん。」

「じゃあわざと帰りましょうか。もうこんな時間だわ。」

久しぶりに和ちゃんと一緒に帰つた。和ちゃんに話してだいぶ楽になつた。

（桜ヶ丘高校）

「さわちやん！何も言わずに私に学校の」

第十一話 悩みと決意（後書き）

久々に唯視点で書きました。次回はたくさん新キャラ出でやうと思つてます！

第十一話 感想を書く（繪畫部）

感想を書いて下せりた様本当にあつがいれどもす！
それでせざりやん！

第十二話 憶みと疑惑

僕は遊園地で起立ったあの一件以来路上ライブを自肅していた。なぜならまた平沢さんに会つてしまつ、そんな気がしたからだ。憂ちゃんのメールも返す気になれなかつた。音楽を止めたいとさえ思つた。しかしそれでも街で音楽を聞くとギターを引きたくなつた。そんな時に僕に出会いがあつた。

（松山高校）

「直哉、お密さんが来てるぞ！」

「誰？」

「なんと、あの赤坂さんだ！」

赤坂さんの本名は赤坂和馬あかさかかずま、松山高校の軽音部部長で、ギターをやつている。身長が185センチあり筋肉質でかなり見た目が怖い先輩だ。

「お前、なんかしたのか？」

「そ、そんなわけないだろ！」

「君が絹谷直哉君か……？」

「はい！？ そうです！」

「そんなにかしいからなくていい。早速だが君の力を借りたい。」

「あの……。『ひこわい』とじゅうづ。」

「ああ、すまんな。だいぶ前に君の演奏を路上で聴いてから君に興味が沸いてな。良ければいまから軽音部にこないか?」

「あ、あの……。」

「やうが。では行くぞ!」

こうして僕は少し無理矢理に部室に連れていかれた。

「おこ!連れて来ただぞ!」

「お、お帰り和馬。」

「紹介しよう!絹谷くんだ!」

「あ、どうせ絹谷直哉です。パートはギターをしてます。」

「ああ、僕は二年の龍崎雅^{りゅうざきまさる}副部長でドラムをやつてゐる。よろしくね。」

なかなか優しそうなヒトだ。多分しつかりものだな。

「俺は一年の速水大和^{はやみねやまと}、パートはベース。よろしく。」

ここつは短髪でとても爽やかなやつだ。凄いモテやつ。口調が少しふざけているが……。

「一年、速水武蔵^{はやみねむさし}。キーボードをやつてゐる……。大和の双子の弟だ……。」

ここつは暗そうなやつだ。しかしそく見ると髪型が長髪なだけで顔

や体つきは大和にかなり似ている。

「そして俺が松山高校軽音学部部長、赤坂和馬だ！パートはギターをやつている！」

まあ、この人は有名だからな。知っている。

「どうしてまた僕なんかを？」

「それは俺が君の演奏を路上でたまたま聴いたときに気に入ったからだ。覚えてないか？一ヶ月くらい前のことなんだが……。」

よくよく思い出すとグラサンをかけた男が「ブラボー」と言つた気がする……。

「とつあえず俺たちの演奏を聴いてみないか？」

「あ、はい！」

彼らの演奏は本当に凄かった。きつかりとあつたリズム。赤坂さんのレベルの高いギター。本当に高校の軽音部なのかと疑つた。演奏が終わると僕はただ呟いてた。

「凄い……。」

「おー…どうだつたか？」

「凄いです……。本当に凄いです！」

「さうか！満足してくれたか！では早速入部してくれないか？」

「すこません…。やのじとは少し考へさせてもらひでませんか?」

いきなりだつたし今は音楽をしてこるのが辛かつたからだ。

「せうか…。仕方ないな…。だが俺たちは何時でも待つて居るわ。」

「帰り道へ

「音楽、か…。」

実際、赤坂さんに誘われた時は嬉しかった。だけビビリしてもやる気が起きない。無気力になりボーッとしながら歩いてこないと話しかけられた。

「お、綱谷じゅんー。」

「あ、草薙さん。」

「どうしたの~? 間抜けな顔して。」

「いや、別に。」

「ふーん。まつ、綱谷に恼みなんかあるわけないかー。」

「酷い言ことひですね…。」

「あ、さつきそこの商店街でうちの学校の子が路上ワライブやってたわよ。なかなか上手だったし聴いて来たり~。」

確かあそこの商店街は…。

「すいません！失礼します！」

「あ、ちょっと…」

草薙さんの言葉も聞かずに僕は走り出した。

「ハアハア。確かにこの角を曲がつたところだ…。」

期待した。とにかく走った。何故かは分からなかつたけど行かない
と行けない気がした。角を曲がる。そこに彼女はいた。

（続く）

第十四話 仲直り（前書き）

みなさま、おはようございます。最近更新早いですが学校のテストがあるので今月はこれが最後の投稿になると思います。では皆さん12月にまた会いましょう！

第十四話 仲直り

（唯視点）

「じめんね、ギー太。 今日のここの子と行つてくれるね。」

私は愛用のギターに書類を掛け先生から借りたアコギを手に持つ。

「豪～？ 行つてくるね～。」

「今日もこいつもどうづ～？」

「うん。 晩御飯までには戻るよ。」

「お姉ちゃん、行つてらっしゃい。」

「行つてきます。」

歩いて十五分もかかる場所にある商店街。初めて縄谷くんとあつたその場所に今日も私は向かった。

（商店街）

「縄谷くん今日も来なかつたなあ……。」

ここで路上ライブを初めてから一週間ぐらい。縄谷くんとあつた初めて会つたのは確か6時から7時の間だつた。私はみんなより少し早く部活を切り上げてここにいる。いつせやんも澪ちゃんもムギちゃんもあざにゃんも私が何故早く帰るかは深く聞かなかつた。多分みんな分かつてくれてたんだと思つ。

「そろそろ帰らつかな…。」

空も少し暗くなつてきている。そりゃれば今日は誰か知らないけど高校の先輩が聴いてくれてたな…。

(あと一曲にしよう。)

そつ思い私は静かに曲を引き始めた。初めて会つた時に綱谷くんが引いていた曲を…。

「平沢…さん？」

私は声がするほうを見た。そこには綱谷くんが立つていた。

「あの、平沢さん…。何で」「元気?」

私は言葉が出なかつた。そして悲しい訳でもないのに涙が出てきた。

「綱谷くんー」「めんねー」「めんねー！」

そつ言つて泣きながら彼に抱きついてしまつた。後で思い出したら自分でもとつても恥ずかしくなるだらう。

「ちよ！？平沢さん！？」

「わ、私のせいで、綱谷くんに凄い不甲斐な思いさせたのに…。あ、あのとき謝れなくて、だから、謝りたくて、ずっとこの場所で綱谷くん来るつて思つてずっと待つて…。」

「平沢さん…。」めん…。

「な、何で綱谷くんが謝るの?」

「僕は、平沢さんに会つのが気まずくてずっと音楽から曲を背けてた。平沢さんは僕のためにここまでしてくれたのにさ…。」

「綱谷くん…。」

「あ、あとで…。もう少し離れてくれないかな?恥ずかしいんだけど…。」

「「ん」「めん…。」

「いや、大丈夫。遊園地の件が、もつ気にしてないよ。」

「本当に…?」

「うん。」

「じゃあね。仲直りのために明日一緒にドライブ出来ないかな…?」

「二人で?」

「うん。」

「わかった。」

「じゃあ…。」

「ん？」

「指切りだよ。」

「わかつた。」

「じゃあ行くよ。ゆ~び~き~つ~ばんまん...。」

「うれ~ついたら~。」

「は~りせんぼんの~ます。」

「指切つたー。」

「約束だね！」

「うふ。じゃあそろそろ遅いし帰るつか。」

「うふ。」

「つづた私は彼の手を取つて歩き出した。

（直哉視点・帰り道）

「んでね、沢山の人気が聴いてくれたんだよー。」

平沢さんはつきから嬉しそうに話している。そういうえば今日は彼女に抱きつかれたり手を握られたりなかなかハグニングだな。

「あ、こ、え、ま、縄、谷、へ、ん、ば、ん、ド、組、ん、で、な、こ、の、。」

「まだ組んでなことよ。でも今田で組んで見よつて思つた。」

「あ、か、め、互、頑、張、り、つ、ね、。」

「お、姉、ち、か、ん、。」

「あ、憂、。」

「あ、縄、谷、や、る。今、田、は、お、姉、ち、や、ん、と、一、緒、で、す、か、？そ、れ、を、う、か、な、つ、て、お、姉、ち、や、の、迎、え、に、行、つ、た、ん、で、す、ナ、ジ、。」

やうこつた憂ひやんは凄こく笑顔だつた。

「じ、や、あ、今、口、か、り、縄、谷、や、の、こ、の、こ、の、兄、ち、や、ん、つ、て、平、ば、せ、て、。」

「ひ、み、と、話、が、飛、び、わ、ざ、じ、や、な、い、か、な、。」

「？」

こひこひ首を傾げてこひこひのだらつへ平沢さんは首を傾げてこひこひ

。。

「あ、僕、ま、の、角、左、だ、か、ら、。」

「私、た、ひ、ま、み、り、す、ぐ、だ、ば、。」

「じ、や、あ、な、。」

「うん。また明日ね。約束だよ。バイバイ。」

「 もういひながり、繩谷さん。」

彼女達と別れ僕は帰路についた。

商店街

翌日の夕方、僕はアコギを背負つて商店街に向かつた。平沢さんとの約束だからだ。

「あ、平沢さん。待つた？」

「ううんー今来たところだよ。」

「うん。じゃあ行くよ。僕の歌引けたよね?」

「うん！」

「よし！ワン！ツー！スリー！フォー！」

松山高校

「あの、赤坂さん！」

「おお、絹谷じやないか。決めてくれたのか？」

「はい、あの二れお願ひします。」

そういうふた僕は赤坂さんに入部届けの入った封筒を渡す。もう迷いはなかつた。

「よし、確かに受け取ったー!ようこそ、松山高校軽音部へ。」

こうして僕の新しい音楽が始まった。

（続く）

第十五話 初メール（前書き）

今回はとても短いです。

第十五話 初メール

（松山高校）

（腹、減ったな…。）

そんな平田の四時間目。後少しだけ飯である。そんなことを考えていたらいきなり携帯のバイブがなる。

（ヤバッ！？）

急いで携帯のバイブを止める。運良く誰にもバレていない。一番後ろで良かつたと思つ。

（誰だろ？）

いつもの音楽サイトのお知らせメールかと思つて見てみたら知らないアドレスだった。

sub・jんにむは(< - >) -

本文

フフフ、綱谷くん。私は誰でしょう（笑）

あーこのメール平沢さんだわ。間違いない。

sub: じんにむけま

本文

平沢さんでしょ?

送信。何故平沢さんが分かったかって? だってアドレスにアルファベットでギー太って書いてあつたし。

あ、返事きた。

本文

な、何で分かったのかな!?

あ、慌てる。

本文

だつてアドレスにギー太って書いてあつたし。

送信つと。

まあしかし授業中携帯使つても意外とバレないもんだな。

本文

さすがだね、絹谷くん!

憂にアドレス聞いたんだけど迷惑だったかな?

全く迷惑じゃない。むしろ嬉しいぐらいである。憂ちやん、さすがだな…。

本文

大丈夫だよ。

昨日はお疲れさま。

こんなもんかな?

本文

お疲れさま!

また一緒にライブ出来るかな?

また一緒にできたら楽しいだろうな。

本文

うん。また一緒にしよう。

ストレート過ぎたかな?

本文

本当に!?

絶対だよ!

あ、授業終わっちゃうからバイバイ！またメールするね！

あ、いつも授業終わるな。しかし女子にまたメールするねって言われるの気持ちいいね！

本文
約束するよ。
またね。

あ、チャイム鳴った。

「絹谷…。食堂行くぞ。」
「あ、武蔵。分かった。」
（食堂）

「直哉、授業中何携帯見ながらニヤニヤしてた？」

ヤバッ。見られてた？

「な、何でもない！」

「何だ、彼女か…？」

「だから違つ…。」

「直哉、武蔵隣いいつスか？」

「あ、大和。座れよ。」

「ありがと、直哉！」

フツ。よくやつた大和。よく話をばぐらかしてくれた。褒めて使わす。

「あ、大和。こいつ授業中にニヤニヤしながら彼女とメールしてやがった…。」

「え？マジっスか？誰々！？」

(くそつーお前もか！)

「あ、用事を思い出したー先に帰るー。」

「「あ…。」「

僕はすかさず逃げ出した。後で聞いただされ説得に時間をかけたのは言つまでもない。

（続く）

第十五話 初メール（後書き）

どーも紅茶花伝です。

テスト前でヤバい状態ですが11月27日が「けいおん！」の主人公でありこの小説のヒロインである平沢唯の誕生日だから投稿させて頂きました。つまりこの後書き書きたかっただけです（笑）
とりあえず

Happy Birthday Yui!!!

第十六話 ギー太の兄弟！（前書き）

今日は暇だから投稿します。

第十六話 ギー太の兄弟！

（松山高校軽音部部室）

ついにテストが終わった。今日からやつと部活である。しかしながら準備をしてないな…。

「直哉。ギターは買ったのか？」

「あ、和馬さん。まだ買ってないんです。」

「じゃあ今から行くか？」

「わかりました！」

まあ実際今日買いに行くつもりだつたんだけどね。

（楽器屋）

とうあえず貯金していた全財産である十万円を引き出してきた。半年間バイトして貯めた資金である。

「おー、直哉、こんのはどうだ？」

「「ブフツー」」

僕と和馬さん以外の全員が吹き出した。そのギターの色はショッキングピンクだった。

「や、さすがにそれはちょっと…。」

「そりか…。」

凄く残念そうにギターを戻す和馬さん。

「クククッ…。ショッキングピンク…。」

雅さん…。いつまで笑ってるんですか…。
しかも大和なんか知らない高校の女子高生に外で絡まれてるし…。

（他になんかないかな…。）

そう思いながらしばらくギターを見ると僕はあるギターに目を引
かれた。

ギブソン、ヘリテージ・チェリー・サンバースト。

「いいなこれ…。」

色もいいし形もいい。第一印象は最高だつたが…。

「二十万…。」

高い。高すぎる。

「それはさすがに…、高いな…。」

「少しごらいなら部費から出してもいいんだけど、直哉が十万を払
つたとしてもさすがに部費じゃ残り十万は無理だね…。」

「ですね…。」

「あ、縄谷へんー。」

声のするせりつを見ると桜ヶ丘高校の軽音部の皆わんがいた。平沢さん以外とは少し気まずい。

「「…。」「

何を話したらいいかわからなかつた。その静寂を破つたのは田井中さんだった。

「あの、ほの前まじめん。早とちりをしてれ…。」

田井中さんが謝ると他が続く。

「すまなかつた…。」

「早とちつして申し訳ありませんでした…。」

「「」ぬんなやこ…。」

「あ、いや。氣にしてないし…。」

「直哉…。お前何したんだ…？」

「何でもないですよー。」

「縄谷くんは今田まじめんして來たの？」

「軽音部の皆わんとギター買つて來たんだよ。」

「「あの松山高校のー?」」んこちよー。」

「ん?りつひやん、澪ちゃん、この人たち知ってるの?」

「松山つていつたら凄い上手いことで有名なんだ。」

「そ、そだつたんだ…。」

み、皆さんそんな上手かったんだ…。やつていけんのかな僕…。

「や、それより絹谷くんはどのギターにするのか決めたのかな?」

「ああ、これが気に入つたんだけじね。」

「あ、ギー太だ!」

そうつて平沢さんは僕が気に入つていたギターを手に取る。

「ギー太?このギブソンが?」

「うんーほらー。」

そういうつた平沢さんはケースからギターを取り出した。確かに同じギブソンである。

「うーん。この子はギー太の兄弟かな…?だったらギー助かな…?」

ギー助か…。また個性的な名前だなあ。

「「」のギターお勧めだよー凄くこに音でるんだよー。」

「実は買いたいんだけど持り合わせが足りなくてね…。諦めて他の
にしようかなと…。」

「あの…。私に値切らせて頂けないですか?」

「そうだねー、ムギちゃん値切るの上手いんだよー。私もムギちゃんが
値切ったから「」のギター買ったんだ!」

「え、でも悪…。」

しかし僕がいい終わる前に琴吹さんは店員さんの方に行ってしまった
た。彼女に値切ることなど本当に出来るのだろうか…。そう想いなが
らみでいると

「ヒハイハイハイハイ!」

凄まじい悲鳴が聞こえた。それと同時に凄まじい速さで店員さんが
電卓を打ち始める。

「十一万では…?」

「うーん…。もう一聲…。」

「ヒハイハイハイハイ!」

おとしやかにしか見えない琴吹さんの優しそうな声は今、店員さん
にとって凄まじい恐怖でしかないのだろう。しばりへすると

「あの、綿谷さん。このへんにどうしでしようか?」

そうじつて琴吹さんは電卓を見せる。最初、一二十万円のギターは八万円にまで下がっていた。すげえ…。半額以下かよ…。

「あ、ありがとう…」

「いえいえ。お詫びの印です。」

「でもなんでこんなに安く?」

「あー、この店ムギの会社の系列なんだよね。」

と田井中さん。

「とつあえず本当にありがとうございます。今度お礼をしてくれたよ…。」

「いえいえ。」

「よかつたね!綿谷くん!私もギー太に兄弟が増え嬉しいよ…。」

「そういうえば桜ヶ丘の軽音部ってまだ残つてたんだね。去年で確かメンバーになくなつたから廃部したと思ってたよ。」

と雅さん。

「あ、私が再建しました。澪とムギと唯が入つてくれて去年一年間やつてきました。そのあと梓が入つてくれて…。」

「ああ、君が今の部長なんだ。僕らが一年のころはまだ桜ヶ丘の軽

音部と交流があつてね。」

() 「さうだったんだ…。」 ()

「まあ、また交流できたら僕らも嬉しいよー。じゃお互いに頑張りつ
ね、桜ヶ丘軽音部部長さん。」

「あ、はい！」

「懐かしいな。あの頃はよかつた…。」

なんか和馬さん黄面てる…。

「なんか知ってるか?？」

「いや…。知らない…。」

「知らないicus。」

まあ和馬さんと雅さんが一年の時だしな。てか大和戻つてたんだ。

「よし、直哉のギターも買つたしじやあみんな帰るか!」

「そうだね和馬。じゃあね桜ヶ丘軽音部の皆さん。」

「じゃあ。あ、歯さん今日はありがと。お陰でギター買えました
!・またお礼します。」

「いや、私たちも仲直り出来てよかつたよ。じゃあ歯さん、それ
なら。」

「バイバイ、綿谷くん！」

「「やよいひなひ。」「」

～帰り道～

「で、やつもの桜ヶ丘の女の子なんだったのかな？直哉くん……？」

「え？ほら前にクラスの友達と遊園地行つた時にいりこり…（以下略）」

「へえ、そんなことが…。しかしショーボブの子とやけに仲良かつたねえ…？」

「雅さん…。この前」こつメールしながら一や一やしてましたよ…。

「

「「まじかー?」」

「裏切りものがあああ…」

怖つ！雅さんキャラ変わつてゐし…。

「別に深い意味は…。」

「直哉あああ…」

「はいいい…」

「恋の相談は俺にしろよー。」

「だからちがあああうつてええ！」

かなり強く否定したが僕の断末魔は虚しく夕焼けに消えていった。

（続く）

第十六話 ギー太の兄弟！（後書き）

なんか今回は絶叫が多かったですね（笑）
感想お待ちしております。

第十七話 始動！マイブリス（前書き）

「んばんはー紅茶花伝ですーそういうえば姫さんはPSPの放課後ラ
イブをしていますか？あれ面白いですよね。ちなみに私は全曲パー
フェクト狙ってます。どうでもいいですね（笑）では本編をどうぞ
！」

第十七話 始動！マイブリス

（松山高校軽音部部室）

「お疲れ様でした！」

今田はとてもいい演奏が出来たな。ちなみに和馬さんがリードギターで僕がリズムギター兼ボーカルをしている。

「みんな今から暇か？」

「すいません…。兄弟が腹を空かせているんで…。」

「そういう」とス。お先に失礼します！」

そう言って速水兄弟は帰つていった。ちなみに速水兄弟は大和と武蔵の他に中一の弟と小四の妹、小三の弟がいるらしい。そして両親が共働きで忙しいため兄弟で家事を分担しているらしい。ちなみに料理は武蔵が作るらしい…。似合わねえ…。

「やうか、仕方ないな…。雅、お前は？」

「「めんね和馬。俺も外せない用事があつてさ。」

「あの、僕も少し今から…。」

まあ、僕の場合は嘘だ。でもさすがに和馬さんと一緒にいろいろ危機を感じる。

「そうか…。だつたら仕方ないな…。」

そう言って肩を落とす和馬さん。申し訳ありません。

「パフェが食べたかったんだがな…。」

今なにか和馬さんに似合わないセリフが出たが無視しよう。そうしよう。

（帰り道）

「直哉、ちょっといいかな？」

「あ、雅さん。先に帰られたんじゃ？」

「君が来るのを待つてたんだよ。どうせ君も用事なんかなかつたと思つたし。」
この人はなんでもお見通しか…。

「あはは。バレましたか？といひで僕にどんな用が？」

「ああ、この事について少し意見を聞きたくてさ。」
そう言って雅さんは一枚の紙を取り出す。

「Next Generation～高校生バンド募集～、…？」

「そう！是非ともこれに出たいと思ってさ！だけど先に君の意見が聞きたくてさ。まだ和馬にも速水兄弟にも言つてないんだ。」

「そう」とは先に和馬さんに言つべきじや？

「和馬は何がなんでも叶ひていいって。」

あ、納得。

「君とセッション始めてもうすぐ一ヶ月だけどなかなかいまのバンドに線いつてると思うんだよね。」

確かにまだ一ヶ月しか経っていないが自分でも驚くほどすんなり入った。路上ライブと中学生からの練習の賜物だらう。

「そのライブいつですか？」

「うわー一ヶ月後。」

「わかりました。僕は出たいですー。」

「やつかりーじゃあ明日改めて部室でみんなに話すから。じゃねー！」

「あ、はーーわかるなー。」

ライブか…。楽しみだな！

（松山高校軽音部部室）

「みんな集合ー。」

「なんだ雅？」

「学祭前にこれに出たいんだけどどうかな？」

「なにに、Next Generation～高校生バンド募集～、か…。直哉、お前はどういって？」

「僕は是非とも出たいです。」

「大和と武藏は？」

「面白かったですね…。」

「いいシスよ。出来しゃべ。」

「奇遇だな。俺も出たいと思つたところだ。」

「じゃあ直哉。参加用紙を書いてくれ。」

「あ、はーー。」

参加用紙にいろいろ書いていく。所属高校、メンバーの氏名、それぞれのパートなど。

「やついたら僕たちのバンドの名前なんですか？」

「ああ、和馬。去年のままいいよね？」

「先輩方がつけられた名だ。変えるわけにはいかないだろ。」

「じゃあマイブリス、って書ことこ。」

マイブリスか。意外とまともな名前だな…。つづきチヨリー

イズとかそんな名前かなと…。

「俺は松山チエリーボーイズの方がいいんだがな…。」

「へうあーー? 適当に言つたら当たつたよ!」

「和馬、たすがにそれは…。」

「酷すがるシス…。」

「だな…。」

「まあ、とつあえずこれで行こう! 直哉書き終わつた?」

「あ、はい。どうぞ。」

「じゅ今からみんなで出しへ行こうか。」

「やうだな!」

この日、僕の初めてのライブハウス出場が決まった。その日から僕は和馬さんに毎日じょかれることになる(ギター的な意味で。)

（桜ヶ丘軽音部室奉）

「みんなこれに出てみないー! ?」

「『Next Generation』～高校生バンドの募集～?」

「えつと、やわらぎさん。」れども」とへ。

「これに出るのよー。貴女たちがー。」

「え、でもまだ私たちそんなレベルじゃ……。」

「出よひよみんなー楽しそうだよー。」

「うそー誰の言つ通りだー出よう。」

「律、唯、私は反対だ。まだ私たちは戻すがいい。」

「ナウですよー。澪先輩の言つ通りですーもし失敗したら恥を搔くのは私達なんですよー。」

律が言えば澪が反対する。唯が話せば梓が反論する。このまま話が続くよしに思われたが。

「」「ムギー(ちやん)(先輩)はじい細ひつい。」「

「私は……、出るべだと思つわ。」

ムギーの意図すべてが決まった。

「ムギー。」

「ま、私達の目標って武道館じゃない。なのこなことで出るのこ躊躇している訳にはいかないんじやないかしら。それと私はね、このライブは私達にとって小さな一步だと思つ。」

「ムギ……。」

「多數決なら決定だけど、いいか？梓、澪。」

「わかった。確かにムギ先輩の言つ通りだな。」

「わかりますね。ムギ先輩の言つ通りですね。」

「それでライブはいつなんですか？」

「一ヶ月後よ。」

「ギリギリだな……。」

「よしーじやあ今から練習だーーー。」

「わづだなー！」

「おーーー。」

松山高校軽音部と桜ヶ丘高校軽音部。マイブリスとエリー。この二つのバンドはまた交わることになる。そしてこの出来事が直哉と唯の仲をさらに近付けることになる。

～ 続く～

第十七話 始動！マイブリス（後書き）

やっと松山高校のバンド名が決まりました。ちなみにマイブリスとは「至福」という意味です。

かつこつけすぎましたね（笑）

アニメではHTTの初ライブは冬でしたが話の都合でこの季節にさせて頂きました。ちなみに自分のイメージではこの話は6月の終わりぐらいです。梅雨明けぐらいですかね？ライブの話は設定では夏休みになると思いますね。

無駄話をどうもありがとうございました。これからも頑張ろつと思うのでよろしくお願ひいたします。

紅茶花伝

第十八話 夕暮れの道のり（前書き）

こんばんは紅茶花伝です。テストの山場が終わったので更新早いです。

それでは本編どうぞ。

第十八話 夕暮れの道のり

（桜ヶ丘軽音部）

「ふわふわ時間！」

ライブまであと一週間。私たちエリーは今田も猛特訓をしています。

「完璧だな！」

「ど」がだ！「ド」が走り過ぎだろー！」

「やっぱ勢いが大切だし。」「

「リズム隊はリズムが命だ！」

「あーわかったよ！」

「まあまあ。」

「わっかにやるつよー。」

「よしー。」

「いくよー。ワンツーツースリー。フォー。」

「君を見てるといつもハートDOKI DOKI」

（一時間後）

「ふう。少し休憩するか。」

「わうね。お茶にしましょ」

「お茶お茶~。」

「チャシチャチャチャチャチャお茶~。」

「唯先輩…わしきのパート難しいのに弾けるようになつてましたね！凄いです！」

「えへへへ。一生懸命練習したからねえ。あずにゃんも相変わらず凄いよー！」

「律もわしきの演奏はなかなかいいリズムキープが出来ていたとおもひつい。」

「ムギのキーボードもよかつたしなー。」

「この調子ならこなれうだな。」

私たちが演奏する曲は、ふわふわ時間、わたしの恋はホッチキス、カレーのちライス、ふでぺん~ボールペン~の四曲。ボーカルは私だ。

「次は何する？」

「ふでぺんやりたいー。」

「よし…名前配置に着け！」

「了解しました！りつちゃん隊長…」

「よしこへよー！ワンダーシー！スリー！…

「ふでべんF B～F B～」

「さらばに一時間後…」

「おいー…そろそろ下校時刻じゃないか…？」

「ヤバッ！」

「早く帰りましょー！」

「もうだね！」

「つじて今日の練習はお開きとなつた。

「帰り道…

「あ、私は用事を思い出した。」

「ん？…どした睢？」

「今日ギー太の弦を買いに行かなきゃいけないんだった！」

「ちゃんとメンテしてるみたいですね。」

「いやー。あずこちゃんに怒られちゃったからね。みんな先に帰つと
いて！」

「やつか。じゃ あな唯。」

「唯先輩また明日。」

「また明日ね唯ちゃん。あ、明日はマドレーヌ持つてくるわね。」

「うんみんなまた明日ーあ、ムギちゃん楽しみにしてるねー。」

私はギー太を背負い直しつつの楽器店に向かつた。

（樂器店）

「えーと、ギター弦はつと…。」

私はいつものようにギターの弦を探す。

（やつこいえぱ）のシンネックつてびつやつて弾くんだろー。やつぱ
手が四本の人人が弾くのかな？）

「あ、平沢さん。」

後ろから綱谷君の声が聞こえた。私はすぐに振り返つた。

（松山高校）

「帰るか。」

「お、直哉。今日は練習しないのか？」

「彰、今日はギターのメンテしないとこけないから。」

「大変だな。じゃなー。」

（樂器店）

いつもの樂器店に着く。とりあえず弦を買わないとな。やつれて店に入ると見覚えのある後ろ姿がある。

「あ、平沢さん。」

「あ、綿谷くん！」

「今日またしたの？」

「ギー太の弦を買いにきたんだ。前にギターってメンテするの知らないてあづにやんに怒られちゃったし。」

あづにやん、ああ中野さんか。てか一年もメンテしなかつたんだ…。いいギターなのに…。

「僕もギターの弦を買いにきたんだ。」

「おおー奇遇だねー。」

「やつにえぱわつセツインネック見てたけどひつたの？ まだか欲しいの？」

ツインネックなど値段もとても高い高校生に扱えるものではない。

「これでひさしひ弾くのかこつも気になつて。やっぱ四本腕の人かな？」

笑いそうになるのを堪える。相変わらず平沢さんは天然だな…。まあそれが彼女の魅力の一つだらうが。とりあえず教えてあげようかな。

「ツインネックは一人で別のパートを弾くときに使うんだよ。上と下で音を少し変えてね。」

「あ、なるほどー。一年間の謎がとけたよー。ありがとう綿谷くんー。」

「んじゃ弦を買いくことにつか。」

「わうだね！」

「帰り道へ

今田は平沢さんと帰ることになつた。まあ別に緊張はしない。

「そういうえば平沢さんはなんでギブソンにしたの？意外と重いしね。ツクも太いから女の子には弾きにくいんじゃない？」

「可愛い、かー。」

「あははー平沢さんらしいね。」

「もう、笑わないでよー。綿谷くんだってお揃いのギター買つじゃん。」

何でかな?」

「え? まあ平沢さんと同じで、田惚れだよ。」

「お、同じだね!」

そういう一人で笑つ。端から見れば仲がいいよひ見えるのかもな。

「やういえば私たちライブにでるんだよ。」

「もしかしてこれ?」

そういうて僕は雅さんから貰つたポスターを取り出す。

「そうだよ! これ! 私たちこれにでるんだなあ。綱谷くんは見に来てくれる?」

「実は僕たちも出るんだ。」

「そりなのー? 一緒に頑張るよー。」

「そうだね。頑張るわ。」

「うん! あ、ここでさよならだね……。」

少し残念そうな顔をする平沢さん。僕ももう少し話がしたかったな。

「またね。」

平沢さんは僕に笑いかけると僕とは反対の道を歩きだした。

「うん。じゃあねー！」

似合わないくらい大きな声を出した。少し恥ずかしい。だけど平沢さんはちゃんと答えてくれた。僕に負けないくらい大きな声で。

「またねー！」

帰り道一人で歩いてふと思つた。平沢さんもライブにでるのか…。

僕ももつと頑張りつつ…。そう決意した。

~~~~~

綿谷くんと別れた私は帰り道を一人で歩く。もう七時を越えたのにまだ空は綺麗な夕焼けだった。

(もう少し綿谷くんと話したかったな…。)

ふとそんなことを考える。綿谷くんと話すのは楽しい。綿谷くんと話していくと憂や和ちゃん、りつちゃん、澪ちゃん、あづにちゃん、ムギちゃんの誰とも違つよくわからない感情が沸き上がる。私は今までこんな感情を感じたことはなかった。まだ私にはこの感情がわからぬけど、だけどこの感情が嫌じやないのは確かだつた。

（続く）

## 第十八話 夕暮れの道のり（後書き）

感想、ご指摘お待ちしております。

## 第十九話 ライブ！（前書き）

“どうも、こんばんは。紅茶花伝です。今日は今までに類をみなこ長さ  
でグダグダかもしません。すいません。では本編をどうぞ。

## 第十九話 ライブ！

（ライブハウス）

ついに本番だ。僕はこの一週間、和馬さんにじかれてきた（ギター的な意味で）和馬さんのギターは凄かつた。作曲もセンスがあった。作詞はなんとも言えなかつたが…。

「みんな。ついに本番だな！」

「そりだな和馬。」

「俺たちは今日まで必死に練習してきた！誰にも負けん！みんな行くぞ！」

「「ウオオオオオ！」」

みんなテンションが高い。あの武藏でさえだ。

リハーサルが終わつて少し時間があるときに平沢さんに会つた。

「おおー・綱谷くん！」

「あ、平沢さん！」

「リハーサルは終わつたの？」

「一番最初だつたよ。平沢さんたちほー！」

「次の次。最後だね。」

今回出場するのは五チーム。リハーサルは出場する順番にあるのでトップバッターが僕たち、ラストが平沢さんのバンドとなる。

「調子は?」

「一生懸命練習したから大丈夫だよ!」

「おーい、唯。つて綿谷じやん。」

「あ、田井中さん。」

「なに? 松山高校も出るの?」

「まあそういうことだね。」

「お互い頑張り!」

「ああ!」

互いに握手を交わす。この前の遊園地の一件を考えたら考えられないことだな…。

「放課後ティータイムのメンバーの方はリハーサルの準備をお願いします!」

「お、始まるな。行くぞ唯!」

「いいづ、りつちゃん!バイバイ綿谷くん!」

軽く手を振り替えしておく。てか平沢さんたちのバンド名放課後テ  
イータイムって言うんだな…。

「直哉……。集合だ……。」

「ああ、武蔵。すぐ行く。」

和馬さん、雅さん、武蔵、大和、僕の五人が集まると和馬さんが僕たちにTシャツを配り始めた。黒の生地で前にクローバーが後ろに松山高校軽音部と赤い糸で刺繡されている。凄い派手だな……。

「昨日の夜に俺が刺繡した！」

「和馬さんに刺繡が出来たんですね。」

「武藏？なんか言つたか？」

一  
な  
に  
も  
」

「まあいい…。名曲本番まで少し時間があるので休憩しておこう。

~~~~~

「あ、憂と和ちゃんと純ちゃんだ！おーい。」

「あ、お姉ちゃん！」

「唯、お誘いありがとうございます。」

「先輩、ありがとうございます。」

「ううん。和ちゃんも純ちゃんも来てくれてありがと。」

「あ、梓ちゃん。」

「憂、純。」

「梓～、緊張してんじゃない？」

「少しね。」

「みんな、もうはじめるだ。」

「やうだね澪ちゃん。行つてくね。」

「行つてうしやい。ちやんと見ておくからね。」

ギターのチューニングは完璧か。メンテナンスも一昨日したしな。

「準備出来たかみんな？」

「ああ、和馬いつでも行ける。」

「大丈夫ッス。」

「OKですね…。」

「はーー行きましょー。」

「よし、こへやー。」

つこに本番だ。

「じつも姫さん。松山高校軽音部のマイブリストです。」

「じつも姫さん。夢でお会いして以来ですね。」

「こわなり氣持ち悪いなー。」

「ブフシー。」

雅さんが吹き出す。会場からも笑いが起きている。

「おーおー笑わないでくれよ。コントやつてんじゃないんだぜ。な
あ直哉。」

「なんで和馬やつひが話を降るんですかね?...じつ思こますか雅
さん?。」

「ちょっと僕に振らなこぐれよ直哉くん。はぐらかしたいしそう
そろひ行くよ。」

「ああ、やうだな。じゃあ聞いてくれ、恋に焦がれて~2009~

「ワン・ツー・スリー。」

しかし凄い曲なんだよな…。恥ずかしくなる…。

本当に適当なMCが終わりカウントを始めた雅さん。まあ打ち合わ
せどおりなんだけじ。しかしMCはふざけても演奏はふざけない。

一曲田は完璧だ。ボーカルも問題ない。和馬さんご満足では練習では見せたことのないパフォーマンスさえ見せていく。

「どうだつたかアアー！？」

観客席から歓声があがる。

「じゃあ次行ってみよおおー！」

似合わない感じだが僕も叫ぶ。一曲、二曲といくつもだんだんテンションシヨンがあがる。武蔵もキーボードのパートがないときは手拍子などで盛り上げていた。大和のベースもかなりいい。和馬さんと雅さんは言つまでもなかつた。てかなんで和馬さん上半身裸なんだ？ 疑問に思つているうちに二曲田が終わる。

「最後は自分が作曲した曲です。バラード調なんで手拍子をお願いします。」

演奏を始めるとみんなが手拍子をしてくれる。そのとき僕はふと和馬さんが言つたことを思いだした。

(「いいか、直哉？俺たちはプロじゃない。だから歌詞は自由に書け。聞いてもらつ人に自分の思いをぶつけろ。」)

うん。和馬さんらしき台詞だね。そして曲もクライマックスだ。

ジャー

終わった。

「みんなありがとうございました。」

拍手が起立った。凄い気持ちがよかつた。

（樂屋）

「みんなお疲れだった。」

「和馬、なかなか疲れたね……。」

「次は文化祭ツスねえ。」

「ああ……。」

「次のグループの演奏始まりますよ。」

「よし。行くか。」

「その前に服を着てください。」

「ブフツ」

雅さんまた吹き出している。この人のツボが少しわからない。とりあえず次のバンドを見に行くとしよう。

（～～～～～～～～～～～～～～）

「いやあー。絹谷たち凄かつたなあ……。」

「ああ。そうだな。」

「でもギターの人（和馬）凄い怖かつたです」。

「そ、そ、うだな。」

「でも私たちも負けてないわよね？」

「ああ。精一杯やうう！」

(縄谷くん凄かつたなあ。私もみんな演奏できるかなあ?)

一 唯
? ど
し
た
?

なんでもないよ、頑張ろ！」

「次で最後ですね。」

「そうだな。」

一つ目のバンドは普通だった。よくもなく悪くもなく。

三つ目は酷かつた。ベースもギターもメチャクチャで唯一のボーカルの女人の歌唱力で持つてゐる感じだつた。

四つ目のバンドはギターとドラムとベースのバンド。オリジナルはなかつたがなかなか旨かつたな。

「直哉。飲み物取りに楽屋いくぞ。」

「あ、はい！」

（樂屋）

「まずつたな…。」

「大丈夫唯ちゃん？」

「うん…。」『めんね…。』

「まさか唯がここまで緊張するとはな…。」

私が緊張しているのは失敗したらどうしようかという恐れからだ。
もしかしたら無意識のうちに綱谷くんと自分を比べてしまったのか
かもしれない。

「ヤバイな。あと五分で始まるぞ…。」

「唯抜きでやるしか…。」

「駄目ですー！五人一緒にじゃないなら辞退したほうがマシですー！」

ガチャ。

「あ、みんなどうしたの？」

綱谷くんともう一人のギターの人気が入ってきた。

「いや、唯が緊張しちゃってさ…。」

「いや、唯が緊張しちゃつて、出れそうにないんだ。」

「

あの平沢さんが緊張か…。

「律ーあと一分しかないぞー。」

「おー、直哉。ぐる…」

「和馬くんー。ツインギターで出ましよー。」

反射的に叫んだ。後悔はしないな。

「お、おお。まあそのつもりだったが。」

よし。

「平沢さん。五分ぐらいなり時間を稼げるからその間に落ち着ける
？」

「クン

平沢さんは少々頷く。

「おー直哉。ギー助だ。」

「あつがとついでこまかー。」

「よし、行べー。」

「はい！」

てか彼女が僕のギターにギー助つて名付けたの和馬さん覚えてたんだな…。

「ステージ」

「皆さんがここにまわー！」

「わっあお会いして以来ですね。」

やつぱり観客はみんなざわざわしているか。

「放課後ティータイムの皆さんのお準備が少し遅れているので少し僕たちの歌を聞いてください！」

「女の子の準備は待つてやるものだしなー！よし行くぞ！ハヤシライスの唄！」

このハヤシライスの唄は名前はふざけているがかなりレベルが高い。ちなみに和馬さんにしごかれている（ギター的な意味で）時の夕食がハヤシライスのときに和馬さんがネタで作曲したものだ。リズムギターとリードギターのパートしか作ってなく実質僕たち一人だけの歌だ。まさかここで役にたつとはな…。
わからないものだ…。

「樂屋」

「大丈夫唯ちゃん？」

「うん、もう大丈夫だよ。ありがとうムギちゃん。」

「唯、確かに絹谷たちは凄い。」

「うん」

「でも私たちも負けてないわ！」

「そうだ！私たちも負けてない！」

「うだよ！」
「めんね。つっちゃん、澪ちゃん、マキちゃん、あやこさん。そ

「唯、
行けるか？」

「うん。」

「私たちの演奏見せてやろうぜ！」

۱۰۰

ステージ

「こんにちは皆さん放課後ティータイムです！さつきはお待たせして申し訳ありませんでした。だけどもう大丈夫です！私たちの演奏を聞いてください！それではいきます。ふわふわ時間！」

「ワン！ツー！スリー！」

「君を見るといつもハートDO KI DO KI」

一曲田、二曲田、三曲田が終わっていぐ。 じじまでもみんなニースはない。 大丈夫。 最後までいける。

「最後になりました。 聞いてください。 ふでぺん～ボールペン～！」

「ふでぺん F U F U ふるえる F U F U ...」

無我夢中で歌つた。 放課後ティータイムのみんなのために、何より絹谷くんのために。

「じじまできたから かなり本氣よ」

終わった。 そう思った瞬間拍手が起ころ。

「「ありがとうございます！」」

みんな観客席に向かつて手を振る。

(絹谷くんは…、いた!)

絹谷くんを見つけてさつきより大きく手を振った。 お礼の意味も込めて。 絹谷くんも返してくれた。

(私、頑張ったよ!)

（ライブ終了後）

平沢さん達いい演奏だつたな。 決して誰かが飛び抜けて上手いわけでもなくみんなが特別に上手いわけでもないのにあんなに心が引き寄せられるのは彼女達が本当に楽しんで弾いていたからだろう。

「うわっ…何だこの人達!…?」

「私たちひファンになっちゃいました!…」

女の子達から声をかけられる。とか絶対みんなに言つてるだろ…。

「ちょ、止めて欲しいッス!」

僕たちは男の人たちからの声が多くつたが大和だけ女の子ばつかだ。
死ねばいいのに。

「双子なのに複雑な気分だ…。」

「お前ら顔はそつくりなのにな。」

武蔵と愚痴つてると声を掛けられた。

「お、綿谷じゅんー!」

「あ、草薙さんー。どうして?」

「桜ヶ丘の子が出てたからね。綿谷たちのステージかっこよかつた
よー。」

「ありがとうございます。」

「うんー…じゃまたね。」

そうこうして草薙さんは一緒に来ていた友達と帰つていった。

「知り合いか……？」

「まあね。」

「一|股か……？」

「違ひつー|股でも一|股(?)でもないー」

「冗談だ……ムキになるな……。」

「くへー謀つたな武蔵。」

「だから、本命つてなんだよー。」

「綿谷くん?」

「あ、平沢さん……。」

「じゅあな……。俺は先に向ひでむけられてるく……。」

「あの……。わざわざおつがとい。綿谷くんのお陰で助かりました。」

「いや、僕はなにもしてないよ。」

「でも、私助けてもらつたからこれでおあこいつて、それは

「ほり、ギター値切つてもらつたからこれでおあこいつて、それは

さすがに安上がりか。」「

「今度お礼をせてくれない…かな?」

「え、でも悪い…。」

「お願こしめす。」

「じやあ楽しみにしておいてよ。」

「本当?..」

「うん。」

「おーい帰るわー。」

「あ、つりやんー今こへよーじやあまたね綿谷くんー楽しにしつてねー。」

「じゃあね。」

「バイバイ。」

それだけ黙つと平沢をさせみんなのところに戻つてこつた。

「おこー綿谷ー帰るわー。」

「あ、はーー今こきますー。」

「なんだまた彼女か?」

「そんなんじゃないですよ。あ、打ち上げ行きましょー！」

「やうだな！行くぞ！」

少し暗くなつた帰り道を歩く。今日は本当に楽しかつたな。満足感で胸がいっぱいだつた。

（続く）

第一十話 夏休みの暇な日 (前書き)

いつも紅茶花伝です。久々の更新です。では本編をどうぞー。

第一十話 夏休みの暇な日

（綿谷家）

（暇だ…。）

それだけを考へていた今日この頃。夏休みに入り部活以外ではあまり外に出ない日々。しかも今日は部活が休みなのでなにもすることがない。

（久しぶりに路上ライブでもするか…？）

しかし時間はまだ昼の一時じる。かなり暑い。はつきりと冷房の効いた部屋から出たくなかった。

（やっぱりやめとくかな…？）

その時携帯がなった。

（ん？誰だ？）

（うわ、武蔵や彰あたりだろ？と思いつつメールを確認してみる。

F・O・M・草薙

本文

今、暇？

暇だったりちょっと出でなくなってる。

(草薙さんかく。)

少し迷つていたら電話が掛かってきた。

「はい、もしも。」

「あ、絹谷？今商店街いるからすぐに来なさい。」

「はい！？」

「わかつた？じやあね。」

卷之三

「なんといつ身勝手な……。」

多少面倒だが行くとするか…。急いで準備をする。
しかし本当に急だな。

商店街

「おーこー！ おーこー！ おーこー！」 遅ニギヤ。

「草薙さん……。メールしてから三十分ですよ……。せめて褒めてください……。」

「せこせこ。せぐぐぐ。」

『الراحل؟』

「新しく出来たショッピングモール。」

最近出来たショッピングモールはかなりの規模で一回は言ってみた
いかなみたいには思つていた。

「そんな急に……。」

「駄目……？」

「クッ！何で涙目なんだ！断れないじゃないか！」

「わ、わかりました……。」

「やつと決まつたら行くよーほらー早くー！」

「嘘泣きだつたんですかー！？」

「当たり前じやない。綿谷ひてば騙されやすこねー。」

「酷……。」

勢いで僕は草薙さんとショッピングモールに行くことになつてしまつた……。

～ショッピングモール～

「ねえこの服どう？？」

「えーと。似合つりますよ。」

「じゅあいひぢま？」

「恥いんじやないですか?」

「綿谷適時に言ひなー?怒るも?」

「へ、適時じやなこですかー。」

「ふーん。じゃあ綿谷が選んでみ。」

「はー?」

「[冗談よ]冗談。」

()の人に…。

「おトナやめな綿谷くそにはまだ女の子の服なんか選べませんもんね~。」

「草薙さん、酷くぞじやないすか…?」

「あぬまね。」めぐ、「あく。じゃあひよひ待つて。」

「あ、はー。」

やつこと草薙さんは一時間悩んだあげくに最初に選んだ服を買いました。

「向で女のトドケんなに服に時間かかるのかな…。」

「綱谷お待たせ。じゃあ次行くよ。」

「次はど」「?」

「ランジェリーショップ。」

「ランジェリーショップ?」

「知らないの?」

「すいません。」

「大丈夫よ。きっと綱谷も気に入るから。」

ランジェリーショップとはなんなのだろうか?まあ僕も気に入ると
草薙さんも言つてるし大丈夫だろう。笑顔怖いけど。

「ランジェリーショップ」

「あの~、草薙さん、ここは?」

「ランジェリーショップ。」

「ら、ランジェリーショップって女性の下着の専門店のことだった
んですか!?」

中学校では女子と関わりなんかまつたくなくしかも高校は男子校である。知つてゐるはずがない。

「ほら、サッサ行く。」

「え? ちよ、ちょっと草薙さんー?」

いつして僕は人生初のランジェリーショップ入場を果たした。

「店内」

「心頭滅却、煩惱退散…」

「ねえ、綱谷? これどり?」

草薙さんが手に持つて見せてきたものはピンク色のフリフリしたブラ…とパン…だった。

「く、草薙さん! ? 何で言つもんを見せるんですかー?」

「似合つと御ひづへ?」

「知りませんよー。」

「あら残念。好みじゃなかつた?」

「わうじやなくて…。」

「綱谷は私の下着姿みたい?」

いきなり僕の背中に胸を押し付けてくる草薙さん。くそッ…デカいツ…

「く、く、く、草薙さんー?」

「いいよ、綿谷こなひ…。」

耳元で囁かれる。限界だ…。

「やつぱ外で待つてますー。」

きぬたじにげだした。つまくにげれた。

僕が外に出てから十五分くらいしてから草薙さんは店から出てきた。

「綿谷なに逃げだしてるのよー。」

「仕方ないじゃなくてますか…。」

だつて僕思春期真っ只中の高校生だし…。

「まあ帰らなかつただけ許してあげるわ。」

「どうも。」

「やつだークレープ食べましょー。ここの美味しいのよ。」

僕の手を握つて駆け出す草薙さん。そついえば女性に手を握られたのは平沢さん以来か…。あのときは何であんなにドキドキしたんだらうか…？

(何考へてるんだか…。)

「ねえ、綱谷何にする?」

考へていろいろうちにクレープ屋についたらしく。

「じゃあ僕はレタスとシーチキンで…。」

「私は…、チヨコといちゴにするわ。」

「あ、僕が出しますよ。」

「え? さすがに悪いわよ。」

「別に構いませんよ。」

「じゃあ…。ありがと。」

「お待たせしました。八百円になります。」

ベンチに座りクレープを食べる。

「ねえ、それ美味しい?」

「美味しいですよ。」

「頂き!」

あ、僕のクレープかじりやがった。

「うん、意外にいけるはね…。」

「ですね。」

クレープを食べ終わり一息つく。

「ちゃんと帰りましょうか?」

確かにそろそろ帰りたい時間だった。

「はい。」

「公園へ

帰る途中に公園に寄った。特に意味はないけどね。

「やつこちゃん、綱谷ってどうしてギター始めたの?」

「えっと……中学生の頃にあるバンドで憧れてですかね?」

「それで今何年やっているの?」

「今年で四年ぐらいでですよ。でもなかなか上手くなくて……。」

「あら、私は綱谷の演奏好きよ?」

「ありがとうございます。光栄ですよ。」

「綱谷用事を思い出したわ。じめんだけ先に帰つて貰える?」

「あ、せー。わかりました。」

「今日は楽しかったわ。ありがとうございました。」

「じゅうじゅう。じゃまた。」

「じゃあね。」

草薙さんは小さく手を振る。僕も手を振り返しておいた。そういえばベンチの後ろから視線を感じたが気のせいだひつ。

(帰るか…。)

夕暮れの道を歩き出す。まあ、今日は楽しかった。そんなことを考えていたら見覚えのある一いつの影。

(あ、あれ武蔵じやないか?隣の一いつ結びの小さい女の子は誰だ…?)

~ 続く ~

第一十話 夏休みの暇な日（後書き）

感想等お待ちしております。

第一十一話 ライバル！？（前書き）

どうも紅茶花伝です。今回は更新早いですね。

では本編をどうぞー！

第一十一話 ライバル！？

（平沢家）

「あつうーいいー。」

「お姉ちゃんかき氷だよ。」

「あー。ありがとーうー。おしゃー、しみわたるー。」

「今日は本当に暑いね。」

「ね。」

今時間は三時ごろ。とても暑い。

「スイカあるよ?」

「食べるー。」

「じゃあ切ってくれるね。」

「うん。」

しかしとにかく。五時頃にギー太をもって公園にでも行ってみようかな？

（公園）

「憂ー。行つて来ます！」

「行つてらつしゃい。」

ギー太を持つて公園に向かう。時間は四時半頃。まだまだ暑いけど
昼に比べるとだいぶ涼しい。

「今日もギー太に歌作ってあげるね。」

公園に向かうのはそのため。公園だと何だかはかどる気がする。

~~~~~

「こんなもんかな? もつちょっとこのパートにノート効かせてみ  
ようかな?」

作曲を始めてから一週間。大体のリズムは決まった。後は少しリズ  
ムをいじってみて作詞するだけ。

(あ、あの人確かこの前ライブに来てくれた、確か草薙先輩だっけ  
? その隣は絹谷君…?)

なぜか焦った。何でだろ? つか?

(じつは…)

急いでギー太をケースにしまいとつたベンチの後ろにある茂みに  
身を隠す。

(やつぱつ一人は付き合つたりするのかな?)

話を聞くにもなかなか聞けなー。やつはしきこねりに六時ごろになり綿谷くんは先に一人で帰つていつた。

「隠れてこるのはわかつてゐのよ。出できなさい。」  
バレていたみたいだ。少し恥ずかしい。どうあれ茂みから出て草薙さんの前に行く。

「い、こんなにまだ。」

「平沢さんだつたの。どうして隠れたりしたの?」

「草薙さんが綿谷くんと一緒にいたのを見とつたわ。」

「ふーん。」

「あ、あのお二人は付き合つてゐるんですか!?」

「うそ。」

「え…。やっぱ…。」

「冗談よ。今日一緒にだつたのはたまたま。」

ホッとする自分がいた。それが痛いほどわかる。

「平沢さんは綿谷のことが好きなの?」

「あ、やつこいつが…。」

「私は本氣で綿谷のこと好きよ。あなたはやつなの?」

「わ、私は…。」

思い出す。絹谷くんと最初に出会った路上ライブ、絹谷くんに悪いことをしてしまった遊園地、絹谷くんに会うために路上ライブをしたこと、絹谷くんに泣きながら謝って抱きついたこと、その帰り道に絹谷くんの手を握つたこと、ライブのときに絹谷くんが助けてくれたこと…。

「わ、私も絹谷くんが好きですー負けませんー先輩に負けませんー！」

「私だって負けないわよ。お互い頑張りましょー。」

「はーー！」

「まあ、私のほうが進んでるナビねー。」

「え？」

「絹谷とギターだつてしたし。」

「私だって負けでません。このギター絹谷くんとお揃いですー！」

お互ひ一歩も譲らなかつた。いや、譲れなかつた。

「ふう。まあ、いいわ。負けても恨みっこなしよ。じゃあね平沢さん。」

「はーー。さよなら草薙先輩。」

別れる私たち。今日は自分が恋をしているのを初めて自覚した。

（夜、平沢家）

「憂、一緒に寝ていいかな？」

「どうしたのお姉ちゃん？」

「憂に話しておきたいことがあってね。」

「いこよ。」

「お邪魔します。」

「お姉ちゃん、話つて？」

「うん。私ね、好きな人が出来ちゃった……。」

「もしかしてその人直哉さん？」

「うん……。」

「応援するよ。」

「本当に？」

「直哉さんいい人だしね。お姉ちゃんが好きになるのもわかるよ。」

「あ、でも軽音部の皆さんには隠さないほうがいいと思つよ。」

「憂……。」

「うん。明日練習があるからその時話すよ。」

「じゃあそろ寝よっか?」

「うん。お休み、憂。」

「お休み、お姉ちゃん。」

（桜ヶ丘軽音部部室）

「ねえ、みんな。相談があるんだ。」

「ん? どうした唯?」

「私ね、好きな人が出来たんだけど…。」

「な、何だつて…?」

「やつぱり絹谷か!?」

「やつの唯ひゃん!?」

「まさか唯がな…。」

「うん。私は絹谷くんが好きだよ。」

「そんな! 駄目ですよー。」

「あずにゃん…。」

「なあ唯。本気なんだな?」

「うん。私は本気だよ。」

「だつたら私は何も言わなー。」

「律先輩!~? 軽音部は恋愛禁止のままです!~!」

「止めな、梓。軽音部の恋愛禁止は軽い気持ちで私たちのことを不意にするなつてことを意味してゐるんだ。」

「やつだな。それに唯の様子を見る限りお遊びのよひ見れない。」

「

「でもー。」

「落ち着いて梓ちゃん。唯けやんも歯んでのよ。」

「まー、確かに綱谷は唯にこうこらじたしな。ー。」

「みんな。」

「それでも私は唯先輩が心配で…。」

「ありがと、あずにゃん…。」

「だ、抱きつかないで下せ…。」

( (泣きながら言つても説得力ないな…。) )

( 唯梓も見納めかしり。 )

「なあー、澪、ムギ。」

「ん?」

「どうしたのつひやん?..」

「さつぱんの顔が綺麗の」と好きだったんだな。  
「ライブのあとで誰の」とからかったときも顔真っ赤にして否定したのにな。」

「わうね、あの時の妹ちゃん可愛かったわ。」

「よー練習するかー。」

「せうだなー。」

「ええー。」

～ 続く～

## 第一十一話 ライバル！？（後書き）

「おまけー！」

「やつと手にいれた…。」

俺の名前は速水武蔵はやみねむさし、松山高校の軽音部でキーボードをやっている。

「まさかあんな小さなレコード屋に売られているとは…。」

今日手にいたのはジャズが好きな俺が認める数少ない日本のジャズバンドのCD。このバンドは生の演奏しかやりたがらないというこだわりがありCDはほとんど出回っていない。よってファンの間でかなりの高値がついている。

（定額が五万位だから三万なんか安いものか…。）

これはあの店では五千円で売られていた。予約があつたが店主に頼みこんで六倍の値段で譲つて貰つたものだ。確かに高いが熱狂的なファンなら出せない額ではない。

「待てえええ！」

「チツ…。もう追つてきたか…。」

きっと俺の前に予約していた奴だわつ。

「逃げるか…。」

俺も走り出す。しかし…

「なに！？速い！」

ちびっこツインでは圧倒的な速さで俺との距離を詰める。

「へへへー！」

背中に渾身の（猫）パンチが炸裂する。が、

（あまり痛くないな…。）

まあ所詮は女の子だしな。

「そのひつま私のものです！返してください。」

「すでに俺が買つた…。」

「私が先に予約していたんです！返して下さい。」

「嫌だ…。諦めるんだな…。」

「そんなん、そんなん…。た、楽しみにしてたのこ…。」

ちびっこツインは泣き出してしまった。端から見れば俺が悪い。まあ、俺が悪いんだが。

「ンッ！」

「痛つ…。」

「お前なに女の子泣かしてんんだよ。」

「綱谷ーー。」れには訳が…。」

といつあえず事情を話す。綱谷なり分かつてくれるだらう。

「お前が悪いじゃん。」

期待を裏切られたようだ。

「ほひ、貸せ。」

「なにをーー。」

「中野さん、ここがこれあがるだつてや。」

「え?」

「お前ーー?」

「ほら謝れ。」

「くそ…。わかった。それはやるからせめて後で聞かせてくれ…。」

「わかりました…。でもあなたが置つたから貰えません。だけど私が先に聽かせてもらいます!」

「わかった…。」

「これでいいだろ?…。」

「縄谷さんありがとうございました。」

「あ、いや別にいいよ。」

「でもまだ唯先輩とのこと認めたわけじゃないですか？」

「はい？」

「じゃ、それなら一〇〇はまた今度返します。」

「わかった…。帰るぞ縄谷…。」

「ああ、わかった。」

しかし疲れたな…。

(俺が悪いから仕方ないか…。)

夏の夕焼けが綺麗だった。気のせいかな。  
（終わり）

## 第一十一話 余興！（前書き）

お久しぶりです。

久々のわりにはかなり短いですが、了承ください。  
では本編をどうぞ。

## 第一十一話 余興！

「ある日の晩」

「なあ、澪。」

「なんだ律？」

「唯のやつなんか最近寂しそうじゃないか？」

そう言いながら夏の昼真っ盛りな道端を歩く一人。午前の練習が終わり唯や梓、ムギと別れ一人で家に帰る途中のことだった。

「そうか？」

「ああ。やっぱ綱谷かなー？あの一人夏休みなつてから会つ回数減つてそうじやん。」

「あー。」

「それにこの前のライブの」ともあるから綱谷には部長としてお礼がしたい訳ですよ。」

「確かにな……。」

「んで、なにする？」「

「やつだなー。」

「「思い付かないな。」」

「そんな」と呟き夏祭りじゃん。」「

「もうそんな時期か。」

「澪は浴衣着てくんの？」

「それ正月のときもいわなかつたか？」

「あー。あれはほら澪の勘違い……。」

「律はどうすんだ?」

「ムギも梓も着ていくつていつたし私は着ていく。」

「じゃあ私も着ていこうかな…。」

「唯と憂ちゃんも多分浴衣だろ。」

そんな話をしながら早十五分。

一  
じや  
あな漆  
「

「またな

「明日六時集合だからな！」

「わかってるー！」

澪と律がそんな話をしていた頃…

（松山高校軽音部部室）

「お疲れ様でしたー。」

「おこ、直哉…。明日どうすんだ…？」

「明日…ああ、たしか夏祭りか。」

「雅也さんや和馬さんと一緒にまわるつもりだがどうだ…？」

「やつだなー。じゃあ僕も！」一緒にさせてもらひつか。」

「分かった…。伝えておく…。明日六時に駅に集合な…。」

「あいよ。」

（まあ、楽しみかな？）

その頃唯は…

（平沢家）

「ただいま憂ー。」

「お帰りお姉ちゃん。」

「ねー憂。浴衣有ったつけ?」

「うふ。ひがんと準備してあるよ。」

「わすが憂ー。」

「お姉ちゃんが明田さんいるの？」

「軽音部のみんなとまわるよ。あすこせんも一緒に憂もくへる？純  
ちやこも浮かだらここよー。」

「じゅあそぶれかでもうかな？・和せんは？」

「わう誘つてあるよ。」

「明日が楽しみだねー。」

「わうだねー。」

それぞれの夏祭りが始まろうとしていた。

（続く）

## 第一十一話 余興！（後書き）

次回は長めの話を書くので許してつかあわい（笑）

第一二三話 夏祭り（前編）（前書き）

あんましよくないかもしません。ではを本編へいづれ！

## 第一二三話 夏祭り！（前編）

今日は夏祭りです。八時位から花火が上がり始めるので六時位にみんな集合する予定でした。

「会場」

「憂、和ちゃん、誰か見つけた？」

「うーん。なかなか見つかんないね。」

「うひとも。なかなか人が多くてね。」

予定の場所はこの辺のはずですが人が多くてなかなか見つかりません。

「おーい！唯！」

「あ、りつちゃん、澪ちゃん、ムギちゃん！」

「やつと見つけた。結構人が多くてな。」

「あれ、あずにゃん達は？」

「梓ちゃんは純ちゃんと一緒に合流するって言つてたわ。」

「咲ちゃん！遅れてしません！」

「お、来たな。」

「あ、あの。よひしくお願こし申す。」

純じゅんちゃんは少し緊張しているようですが。

「うーーみんな揃つたし行くかー！」

「最初せどりに行くつもりなの？」

「とつあえず何か食べるもの買つて行こう。」

「あ、焼きそば食べたい…。」

「あ、私頃そんの分買つてきます。」

「一人じゃ大変そうだし私も行こうか？」

「じゅあ純じゅんと純じゅんにお願いしようかしら。」

「じゃあ代金。」

「あ、はー。純じゅん、行くか。」

憂と純じゅんは焼きそばを買って行きました。

「じゃあ漆と私はた」焼き買って行つてへる。」

「分かった。じゃあまたすぐな。」

「みんな行つちやつたし私たちは何を買ひつへ。」

私は残つたみんなに聞きます。

「私がき氷と綿菓子食べてみたかつたの～。」

「じゃあ買こに行きましょつ。」

「や」一人ともお店がありましたよ。」

「早く行きましょつ!」

ムギちゃんはちよつと興奮氣味です。

十五分後位に集合場所に決めていた広場にみんな集まりました。

「皆わん、焼あわばりつわい。」

「お、悪いな。」

(うわ～。澪先輩だあ～。)

「ん、ありがとう。」

「ありがとう、純ちゃん、憂ー。」

みんな買つてきたものをそれぞれ分け合います。

「」(この場所で食べる焼きそばつて美味しいよねー。)

「あー。わかる。」

「！」の前行つたプールで食べた焼きそば美味しかったよねー。」

「梓が真っ黒に焼けてた時のでしょ？」

「純一言わないでよー。」

「あはは、梓が一番合宿ではしゃいでたからなー。」

「律先輩ー。」

「確かに真っ黒だつたなー。」

「梓ちゃん楽しそうだつたわ～。」

「澪先輩にムギ先輩までーー？」

「あずにやんは真っ黒でも可愛いよー。」

「唯先輩ー。」

みんなにからかわれるあずにやんはとっても可愛い。

「つつけんたこ焼きちょうどいいー。」

「ほい。誰のかき氷もくれ。」

「はー。」

「ムギー、勝手に私のたこ焼きを食べるなー。」

「つぶふ、ボーッとしている澪ちゃんが悪いのよ。和ちゃんもびびる。」

「

「ありがとう。だけど澪になんか悪いわね。」

（わ、私のたこ焼きがあ……。）

「あ、あずこちゃんたこ焼きを買つて。」

「モードに売つてしまつたよ。」

「ほんとー? つりやんたこ焼きを買つて。」

「あ、行くかー。」

「私も行くわ。」

「じゃあ私も。」

「行こう行こう。」

「唯、走つたら危ないわよ。」

「はあーー。」

「唯つて笛からこんな感じなの?..」

「ええ。幼稚園からこんな感じよ。」

「

「あー。」

「でもそこが唯の可愛いところだけじゃね。」

「やつぱり昔から天然?」

「ええ。小学校のキャンプでインスタントカレー持つてこないといけないときにカレーラー持つてきたり調理実習でたこ焼き作るときにタコ担当の唯がタコ忘れてたこなし焼きになつたりしたわ。他にも数えられないわよ。」

「くくっ…。た、たこなし焼き…。」

「ふふふ…。」

「でもあの無邪気な笑顔見ると不思議と許せるのよね…。」

「「あー。わかるかも知れない…。」」

「つつかやん、澪ちゃん、和ちゃん!早く早く!」

「走なんなくてもたこ焼きは逃げないぞ。」

すぐにたい焼き屋さんにつきました。

「どれにしようかな?やつぱりアンコかな?カスターで?しようかな?」

「私はカレー!」

「じゃあ私はチヨ」「ノートで…。」

「私は粒アンにするわ。」

「じゃあカスターで」「じょひ。」

「たい焼きを畳つて」機嫌で後ろを振り返つたとき元気で誰かに当たりました。

「わっ、すいません!」

「あ、いや。って平沢さんじやん。」

「あ、綿谷くん。」

そこにいたのは紛れもなく綿谷くんでした。

「律、澪、和の話」

「ねえ、律、澪。確かこの人…」ヒンヒン

「ああ、あれが唯の好きな人だ。」

「まさかあの唯に好きな人がねえ…。」

「私たちもびっくりだったよ。」

「なかなかいい雰囲気なんじゃない?」

「やうだな…。」

「私ちよつと松山高校の人と話してくるわ。」

「律ーちよつとまでー。」

しかしそすでに律は行ってしまった後だった。

（松山高校、律の会話）

「こちにちはー。」

「えーと君は確か桜ヶ丘軽音部の部長さんだっけ？」

「ライブ以来だな。」

「覚えていて下さって光榮です。」

「えーと何さんだっけ？」

「あ、田井中です。」

「あの田井中さん。单刀直入に聞くけど直哉と君たちのコードギターの…」

「平沢唯です。」

「そりや平沢さん。なかなかいい感じじゃない？」

「あ、はい。」

「大和…。雅さんなんか企んでないか…？」

「ああ、さうとしか考えられねえ…。」ヒソヒソ

「とりあえずあの二人、一人つきりにさせてみない? なあ和馬。」

「確かにな。おもしろいだ。」

「あ、はい。」

(この人達ノリノリだな…。)

「そうと決まれば早速実行しようつか!」

（律、澪、和の会話）

「律! 勝手に行くな!」

「『めん』めん。いやあ、唯と緋谷一人つきつこさせよつと想つた  
んだけどさ…。」

「断られたんだろ? どうせ。」

「いや、めつちやノリノリだった。」

「何でだよー和はビツツ?」

「澪、声がテカい。」

しかし人の多さから唯と直哉にはバレていない。

「私は実を言つと少し興味があるわ。」

「和まで…。」

「それに唯には頑張つて欲しいから。」

「はあ…。」

「じゃ、やつと決まればみんなを呼ぶか。」

「はい？」

「監視だよ監視。縄谷が唯に何するかわかんないしなー！」

「お前…。」

「皆さん一集合つていつたいどうして？」

「お、きたきた。」

「えーと、今から唯と縄谷くん…だけ?一人を律が無理矢理二人きりにするらしいからその監視をみんなにしてもううらじいわよ。」

「え?え?縄谷って誰ですか?わたくしよく状況掴めないんですが。」

「純は黙つてて。」

「それってお姉ちゃんと直哉さんに仲良くなつてもいいつためにですか？」

「まーね。」

「じゃあ…。」

「じゃ少し行つてくるわ。」

「あ、律先輩…。」

律と松山高校軽音部（九割雅さん）の唯と直哉一人きりにして監視（尾行）してみよう作戦が始まつとしていた。

～～～～～～～～～～～～  
どうも縄谷です。松山高校の軽音部で夏祭りに来ました。たい焼き食べたくなつて少したい焼き屋に寄つたところで平沢さんに会いました。

「わっ、すいません…。」

「あ、いや。つて平沢さんじやん。」

「あ、縄谷くん。」

「奇遇だね。」

「そ、そうだね。」

平沢さん、浴衣か…。なかなか似合つてるな…。まあ素材がいいしな…。

「あ、綿谷くんもたい焼き買いに来たの?」

「うふ。」

「飛ばされたるよ。」

「うん、ってええーー?」

「つこてないな…。また後ろからか…。何か列長くなつてるし…。

「また並び直しか…。まあいいか。といひです平沢は誰と来たの?」

「部活のみんなと友達と豪達と来たよ。綿谷くんは?」

「松山高校の軽音部で…。あれ? 誰もいない?」

「あ、」ひひも。つちぢやん達どじてたんだりひへ。」

まさかあんな話がされてるときか、夢にも思わなかつた。

（続く）

第一二三話 夏祭りー（前編）（後書き）

感想等お待ちしております。

## 第一十四話 夏祭り（後編）（前書き）

どうも紅茶花です！

ぶつけやけ今回の話無理があると思いますが許してください。  
しかも昨日は和ちゃんの誕生日だったので更新しようと想つたのに  
更新しなかったのも許してください。

では本編をどうぞ

## 第一一十四話 夏祭りー（後編）

（夏祭り会場）

「皆さんどこに行つたんだろうか…。」

「いりもになよ。」

「何とか並び直してたゞ焼きを貰ひ、とりあえずみんなを探そうとしたときだつた。」

「あ、雅さんーーど行つてたんすか？探しましたよー。」

「あー縄谷」めん。みんな急用思い出したから平沢さんと回つてく  
れないかな？（棒読み）」

「はい？」

「わかつと雅さんーー？」

「わかつと雅さんーー？」

行つてしまつた…。これはビックリだらうか…？まさか平沢さんと「入り…？何で言つた今日は一段と照れるにさ。ほら浴衣ちゃん。ショートパンツって言つんだつけ？なかなか似合つてゐるし…。あ、優ちゃんと間違えなかつたのは胸のおお…、声が微妙に違つたからだよ。

「歯をさばいていたんだらつか……。」

「いじりがなこよ。」

私は縄谷へんがたい焼きを買つてゐ間かいつひせん達を探していました。

「あ、いつひせんーそれに濱ちゃんも和也さんもついにいたたのー。」

「…。」

「あー。」めん誰。急用ができるわ。縄谷と回りてくれないか? ( 棒読み )

「すまないな誰。 ( 少し棒読み )

「い」みんな誰。また後でね。 ( 極めて演技っぽく )

「はえ?」

「ひーせん。」

「うつとみんなー。」

三人は早々と行つてしましました。何か隣で縄谷へんもドラムの人と同じようなこと言われてるし……。

「平沢さん?」

「ああ、えつと……。何だつけ?」

「いや、どうする？なんかみんなあんぬ感じだしね。」

しかし図々しく綱谷くんと一人で回って良いものなのでしょうか？少し迷います。

「腹、減ったな…。」

「あれ？綱谷くん？」飯は？」

「実はまだ食べてないんだよね。」

「じゃあ何か食べようか。」

「やつれせて貰こます。」

そのあと綱谷くんはいろいろなものをたくさん買つてました。焼きそばを三つとたこ焼き四つ、イカ焼きを一つにたい焼きを五つ…。とりあえず一人でベンチに座ります。

「た、沢山食べるね…。」

「あー。みんなからよく言われるけど普通じゃない？」

「さすがに太らないかな？」

「いくら食べても太らない体质なんだよね～。」

「あはは、私と一緒にね～。」

「もうなんだ。あ、たこ焼き食べる？」

「食べるー。」

「ほい。熱いから気をつけて。」

綿谷くんはたこ焼きを私の口の前に持ってきてくれました。何で言うかあーんみたいな感じです。

「あ、えっと…。」

「ん? 食べないの?」

少しやけになつて食べてしまいました。

「お、おいしいです。」

「なーーーおこしこよなーーー。」

「へ、うん。」

(しかし雑をん句を企んでるのか…。)

~その頃他のみんなは~

「唯ひやん少し困惑つてない?」

「綿谷が馬鹿みたいに食つからじやないか?」

「あー、綿谷は人間じゃないからな。鉄の胃袋もつた何かの怪物だし。」

「初めてみたら、感づばずだ……。」

「あのー、律さん。お姉ちゃんどうしてこんなことになつたんですか？」

「説明していく下さい律先輩。」

「ほら、あれ、唯を応援してあげよつ……みたいな?」

「「「うわあ……。」」

「面白がつてゐだけじゃないんですか?」

「違う!断じて違う!」

(嘘だな……。)

「純ちゃん、なんだねその顔は?」

「な、何でもあつません!」

「あ、二人がベンチに座つたわ!」

「和さんもノリノリですね……。」

「お姉ちゃん大丈夫かなあ……。」

「しかし……。綱谷のやつ憎いな……。和馬さん、どう思ひますか……?」

「綿谷…俺は寂しいぞ…」

( ( 何か何でこの人泣いてんだろう? ) )

「そういえば大和は…?」

「なんかさっき女子高生の集団に逆ナンされたから置いてきたぞ。」

「

「そんなことよりみんな見ろ! 綿谷のやつあーんなんかしてやがるの!」

「龍崎さんでしたっけ? 私なんだか心の中にどす黒い感情が沸いてきやうですよ。ねえ澪ちゃん?」

「ムギ、落ち着け…。」

「あ、立った!」

「とつあえずまだ尾行を続けるとしよう。」

こんなことが行われているなど今の一人は知るよしがなかった。

~~~~~  
「ふー。落ち着いた…。」

「よく食べたね…。」

「もつ少し食べたかったかな?」

まあこれは本当の事だつたりする。実は少し食べたりない。

「次はどう行く?」

「えっと…。行きたい場所は特にないかな?」

「じゃあ適当にまわるつか?」

「うん。」

~~~~~

「あ、綱谷くん、ちょっと待つて…。人が多くて…。」

「あ、めさ。ほい。」

「あ、ありがとう。」

(無意識に手を差しのべたけどやつて良いことだつける。まあ平沢さんも気にしないさ大丈夫か…。しかし…)

(手、差しのべられたから掴んじゃつたけど大丈夫かな…。だけど…)

((恥ずかしいな…。))

(と、とつあえず、綱谷くんと一緒にりなんだからもつと楽しもつ(ー!)

「あ、綱谷くん!あのねこぐるみ可愛こね!」

「あの射的のやつ?」

「うん!あ、ちょっと待つてね!」

そうこいつた平沢さんは早速射的をやりだした。まあ結果は…

「あ、当たらない…。」

「当たらなーいね…。」

すでに五回目。被害総額は一千円に昇っていた。

「僕も一回やってみるよ。」

「うそ…。」

平沢さんかなり落ち込んでるな…。とつあえずやってみるか…。

「おめでとう!こっちはやん!彼女さん!プレゼントかい?」

お約束みたいな展開だなって自分で思つた。それに彼女ではないし…。

「平沢さんビューティー?」

なんか平沢さん顔真っ赤にしてるな。

「な、何でもないよ!スゴいね緑谷くん!」

「あげるよ。」

「え？」

「平沢さん欲しがつてたしゃ。」

「何か悪こ...。」

「じゅあ、いらなにの?」

少し意地悪に聞いてみると...。

「こわー。」

「あはははー。」

「何で笑うのー?..」

だつて平沢さん思つた通りの反応するんだもん。

「何でもなことよ。」

「へー。じぶこと縄谷くー。」

「いぬごいぬご。ほり。」

「あ、ありがと。」

しかし本当に嬉しそうに笑はとるなあ...。やつこえばやうやう...。

「花火つて何時からだつけ?」

「えつと……たしかそろそろのばあ……」

「んじゅうじゅうせじゅう」

「ほえ？ 緋谷くんちよつと待つてよー！」

「尾行の最前列」

いや、「お一人とものろけてますなあ。」

一  
そ  
う  
わ  
く

緋谷の野郎

一  
桺  
落七  
着け

ちひこが黒した

「ちびっこ言わないでください！私のCD横取りしたくせに偉そうです！」

「ちやんと貸してやつただろ？……。俺はまだ聞いてないのにな……。」

「それぐらい当たり前です！あと一ヶ月は借りるつもりです！」

頼むからそろそろ返してくれないか……？

一  
馱目  
で  
す！

「ねえ、憂。この二人はなんでこんなに仲いいの？」  
「わ、分かんない。」

「あれ?誰と細谷くんなんだい?」かしづく。

「まさか見失つたのか！？」

(龍崎さん、うれしいな。)

「何やつてるんですか律先輩！」

「梓と遠水さんが喧嘩してるの見いつてたら逃がしちやつた。」

תְּהִלָּה

「すまない…。」

「ほら、そろそろ花火始まるぞ。唯は絹谷くんがいるから大丈夫だ

「だな！ほら雅、武蔵！大和を探しにいくぞ！」

「わかつたよ和馬。」

(唯々。頑張つてね。)

にして唯と直哉への尾行は終わったのであった。

—

「絹谷くん、疲れたよお……。」

「ほらも少しだから。」

綱谷くんについてからすでに十分あまりがたちます。私と綱谷くんは少し小高い丘の上にある小さな神社を目指して決して短くはない階段を登っていました。

「ハアハア…。」

「ほら平沢さん、着いたよ。」

「うわあー、すげー眺め…。」

この景色に感動していたら  
ヒュウウ　ドン！

「あ、花火！」

「ここ人いないしよく見える穴場なんだよ。今年は来るつもりなかつたけどね。」

そう言って笑う綱谷くんはどうして私を連れて来たんでしょうか？ 疑問に思いながらも今はこの景色と花火を楽しもうと思います。

今年の夏祭りは私にとって忘れられないものになるでしょう。  
（続く）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6958o/>

---

K - O N ! ~ふわふわ日和~

2011年1月10日13時10分発行